佛諸故人續五百題

下

古人續五百題　秋之部目録

附候の部

名月　初丁
月見　二
名月雨　一
月　三
そらの月　三
三日月　二
待宵　三
十六夜　四
后の月　四
龍田姫　五
文月　五
葉月　五
菓月　五
そらん秋　五
七夕　六
立琴　六
銀河　六
かさゝぎの橋　六
頼ひの糸　六
干菜盆　七
せゝらぎ　七
高灯籠　七
ちゝろ鳴　七
おこり火　七
蟲鳴り　八
朔旦　八
蓮飯　八
墓詣　九
生身魂　九
盆の月　九
おはぐろ　九
西瓜　九
花火　十
残暑　十
そまつり　十
穐風　十
月入　十二
ものゝ置　十二
捨ものゝ　十二
初あらし　十二

個人研究費
雲英末雄
56-04596

露 十二
稲妻 十三
木綿 十九
遠峯入 十九
詩の人 十六
鳴子 十七
蔦の紅 十七
河原 十八
涛衣 十九
ちん酒 二十
秋の霜 廿一
霧 十三
野分 十四
田刈 十五
後徳岸 十五
ちん牽 十六
引板 十七
ちの鮭 十七
沙魚 十八
漸寒 十九
雪時雨 二十
長き秋 廿一
後の穀入 十三
早稲 十四
晩稲 十五
ちん潮 十五
放生会 十六
かゝし 十六
落水 十七
崩築 十八
鮠 十八
升市 十八
朝寒 十九
秋の酒 廿一
稔好暮 廿二
二百十日 十三
落穂 十四
司召 十五
八朔 十六
渋鮎 十七
鯨 十八
新そば 十八
夜寒 二十
縄空 廿一

植物の部

林 廿二
一葉 廿三
木槿 廿四
蔓珠沙華 廿五
海棠 廿六
荞麦花 廿七
ちゝぐさ 廿八
花野 廿九
野きく 三十
稲 三十一
赤桔 三十二
ねぶと 三十三
葡萄 廿三
柿敬 廿三
菖の蒲 廿四
男ゑし 廿五
我木瓜 廿六
稲のちゝ 廿七
茸の実 廿八
桔梗 廿九
ちゝぐさ 三十
蘆穂 三十一
かゝしの瓜 三十二
廿丁 三十三
梨 廿三
草の花 廿四
鼠尾艸 廿五
あさがほ 廿五
芙蓉 廿六
萩 廿六
番椒 廿七
蘭 廿八
藷 廿九
雞頭 三十
尾花 三十一
鳥 三十二
刈萱 三十三
若たまこ 廿三
女郎花 廿四
蓼たゝ 廿五
萩 廿七
糸瓜 廿八
ちゝ廿紀 廿八
紫苑 廿九
藜の花 三十
蓼 三十一
梅もゝ紀 三十二
刈萱 三十三

木犀 三十三
栗 三十四
虫 三十五
秋の蠅 三十六
蟋蟀 三十六
いとゞ 三十八
蟋蟀 三十九
鶺鴒 四十
帰燕 四十
鳩吹 四十一
冬近 四十二
木の實 三十三
熟柿 三十四
秋蝉 三十五
蟷蜋 三十六
義山一 三十七
蟷螂 三十八
小鳥 三十九
鶉 四十
鴫 四十一
鹿笛 四十一
椎の實 三十四
紅葉 三十四
燵の旅 三十六
松むし一 三十六
蜻蛉 三十七
いなむら 三十八
鶺 三十九
四十雀 四十
鴨 四十一
雁 四十一
複れ實 三十四
草 三十五
草狩 三十五
秋蚊 三十六
鈴虫 三十六
きりぐす 三十七
鯛 三十八
鶉 四十
鶏 四十一
行秋 四十二

部百七十三頭

古人續五百題 冬之部目録

降物之部

初雪 初丁
雪 二
雪吹 三
みぞれ 一
霜 四
あられ 四
あられ 五
氷柱 八
霜 六
氷 七
凍 七
氷室 七
雪車 七
冬の雨 七

時候の部

神無月 八
小春 八
師走 九
冬至 九
神おろし 九
神の留る 九
十夜 十
達磨忌 十
法華講 十
ゑびす講 十一

暦うり　十一
里神樂　十一
大師講　十二

植物の部

木の葉　十三
枯柿　十五
山茱萸花　十六
ふくの梅　十六
茶花　十七
枯芦　十八
大根曳　十九

生類之部

四火燒　十一
鉢たゝき　十二
寒念佛　十三
落葉　十三
散りこも　十五
八つゝ　十六
ふゝ牡丹　十六
寒菜　十七
草うれ　十八
ふゝ菜　十九
こがらし　十四
帰花　十五
ふゝ至梅　十六
ふゝ仙　十七
石蕗の花　十八
ふゝ野　十八
ふゝ
芭蕉忌　十二
佛名　十二
神樂　十一
枇杷の花　十五
ふゝ椿　十六
枯尾花　十七
ふゝかれ　十八
枯壮　十九
麦まき　二十
鯨　二十
千鳥　二十
ふゝ鳥　廿二
かのたより　廿二
夜鷹　廿三
夜鷹曳　廿三
穴熊　廿三
鯨突　廿三
生海鼠　廿四
鮃　廿四
鰤　廿五
乾鮭　廿五
ふとり食　廿五

時節の部

寒さ　廿六
ばきん　廿七
人表　廿八
吸ひ人　廿八
埋火　廿九
火桶　三十
ふゝ搆　三十
燒初ふる　三十
炭の子　三十
炭俵　廿七
紙子　廿八
火鉢　三十
湯婆　三十
口切　三十
納豆　三十一
ふゝ始　三十一
髪置　三十一
袴着　三十一

爐　三十一
炭賣　三十二
きの入　三十四
霜ずけ　三十四
節季ひ　三十五
年の市　三十六
ぞ〜忘　三十七
春待　三十七
家の暮　三十八
櫂　三十二
冬の月　三十三
雪垢離　三十四
冬日　三十四
燈挑　三十五
節分　三十六
行年　三十七
岡見　三十七
年内立春　三十九
炭竈　三十二
寒月　三十三
臘八　三十四
冬夜　三十四
餅搗　三十六
元ちろく人　三十八
年の歌　三十七
とゝの龍　三十八
炭　三十二
寒聲　三十二
脇　三十四
風呂吹　三十四
衣配　三十六
格さと　三十七
流ろく年　三十七
大晦日　三十八

都而　百四十一題

四季合　六百拾七題

古人續五百題發句集

稲之部

月ゑ金今宵一瀉かけ松なし　宗因
名ゑ名りそもく〜是ハ秋の月　宇武
名月ゑ蓮のまゐり中田のくりて　芭蕉
今宵は月小盃へねけさんさん　耒山
めいろ中居酒のまんと頬かふて　其角
月さはの今宵ゑ明て仮ねろ　鬼貫
名ゑいそ〜はいすひの月や三五良　立圃

名月や 折の枝とそらく吹く　嵐雪
めいろや海もおぼろとゆるもえと　去来
ちとせ森よろふの月まさ望の月　恐尺
名月や車きしらとは 番 家　丈草
めんろや土手のそろれのるひれ藪　浪化
隨分とはしもも出るりろふ月　路通
名月やそこしく歩行草の中　傘下
名ろろや穀の声と 犬のちろえ　二水
めいろや志ろふぬところの朝めろけ　野坡
文くくと鞠垣ととしけふの月　言水
名月や今日をわたらふ秋の昏　支考
めん月やきのふの雨は菜大根　夕日

名月や虫ゑとところよもとぐら　杜若
めの月や碇うちゆむ波のろま　買山
名月や陸のそろあろる日次をろあん　知足
焚ろそしく竈も用けしろふの月　友幽
名月や里の白ひの青ま柴　木枝
名月ゆろをろまとも虫はそしら我　野童
めいろやそろろく鶏は俄きゑく　浪化
名月のとれもゆくみや菜大根　許六
名月や ゑろゆ ゑ穂を出と ゑ平ろれ　千那

月見

月見とる庵ふうのくき敷もなし　芭蕉
月えせん伏見は城のとく廓　去来
つやくと坊へもしつ辺む月えれ　唐介
隈もなく名もなれ赤の月え我　意情
さしきよりて我舟さして月見う角　浮葉
鑰もなき庵あのうの月えうる　泥梨
ふきやうな月伏出とく寄る月え伏　利牛
待も雲ふなりうる月見この那　史邦

名月

とりつやおのれうなる西の月　鬼貫
ふれとて雪うらふ蘇しうふ社月　西柯
名月や西よりてあふ風光て　丈草

月

我乗りて我ふえせうり月秋新　素堂
やとりて東伏ようやくの月　其角
隣より破風のかけうる月秋我　仙杖
江の月や深み浅この剰こうら　鋤立
けうとさふ少しうれむく月よ伏　昌碧
かるくと笹のうへ月夜この赤　梅舌
ふ伏抱く湯は月のくまうら我　北枝
おかしけふ蓋てなうれ月秋れ　一髪
ととまてもえ通とを月は野中うる　長虹
月のなれやうふさしきも晴曇り　万乎
京紫去年は月ふ俗中間　丈草
稲とりの月よ烏いらも泣く　鬼貫

初月

初月の弓ふ強かなり　言水
そんの月や物は香さある霄の宿　移竹

三日月

蜻蛉は羽ひろげまる三日の月　其角
雷のまたこのこゝろ三日はたき　文鳥
三日月や柱ふさわれ高燈籠　錢芷
はつ〳〵穂をつけて出そろふ三日の艾　李由
三日月の数ふ道のはきあつる　万声

待宵

待宵や聖を二見へ道者ゑ　支考
まつよひや流浪のうへは秋のそら　惟然
待宵は紙まつ賞ぜさや年のわと　牧童
まつよひや聖の連歌の表せん　素堂

十六夜

うかほなるよ姉ふ月待宵の興　路通
待宵や立ぢ〳〵ふる三稱の雲　乙由

十六夜もまつと更科の郡　芭蕉
そんうつ〳〵や十六夜まそれ二タとなる　耒山
いさよひや紗眼肉はうまもも　其角
十六夜や首馬ぬ出くかゝ人　許六
いさよひや堅田ろりとる神明講　毛紈
十六歩はけ〳〵き分ろり比良伊吹　汝村
いさよひや眠れまもなれ消り五位　野坡
ひきよひさ〳〵ぬ宵の秋　洒堂
いさ宵や家出の逆ひ人ふ照　乙由

後の月

うまさもきくねとうゑやや月の十三夜　素堂
海山に出る月をとて後の月　去来
百菓は香に出るうゑやや後の月　洒堂
影ふるさとたゝねはとゝる月哉に　杉風
後の月きこめはたゝるや秋茄子　杏雨
三天の松風さふし一坂の清水　野坡
坂は月入くかけとり星は空　鬼貫
徒のうへふ高低もありのちの月　游力
寒ふけの巨燈もあり坂の月　斜嶺
月とちは袖を木の葉の十三夜　重春
草も木も此國ふりや又の月　全昳
酒はきくと膝のさふきや後の月　長父

龍田姫

文月や仮に感ずる歌やのうち　其角
かつらくるる秋月の初うゑ　良徳
八月も一下ゝとあつし赤とんぼ　指巻
野も山も露よりあれるを月うゑ　李雲
あつうゑ九月日和や薮の鶯　水巣
長月やくさ笛ふれ水ゝる　尺艸
菊月の清ゝみうあやし空の星　良徳

ゝまなるのふうきを名とされ彩田姫　和及
うかつゝとほりの顔ひやゝゝと姫　昨非

初鶴

芭蕉

なくや秋や海も青田の一トみどり

鬼貫

初秋はとれの落ぬらめの陸西

卯七

鶴なくや朝日汐はけしきみ

去来

鶴なくふるやはつ秋の日数哉

荊口

なくや秋氏かうとこんとめんおもれ

風國

海山のこゑ絡くるやと朝の炊

野坡

秋きりねとおとをるけさやきさみうり

林旭

あきこんや星も居ぬとわは夜明風

杉風

笹竹の萩鶴をはうこれ〻う郷

支考

嵐風もまこそよめうとそうりなて

句空

山水やまと初あきの香薫散

浪花

なきこんりや鷹のとやもものさし秋

七夕

其角

七夕や梵論ぼうしひとて笛を受

嵐雪

ほ〻〻合ふ我妹かさん待か郎

曾良

動きなそ宮なてしとや星の床

野坡

七夕や稲の葉ふきはかんこちら

支考

五位ゝ拾ふあふのく人や星ゑり

去来

酒盛となるて酒のむ〻むうへ

杉風

七夕よかさ移ゝうとし指合羽

山峰

不一合や離別の中ゑひてえん

錢芷

七夕や馬ゝまとれ川の塵

牧童

七夕を葉ふて藻入るゑ居れ

立琴

可風

立琴やするの志ふるゑ虫の声

希因

ゝてこゝやこ千ゝふ義ゝなゝ

銀河

荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

これやまねく一夜よし糸を引川　嵐雪

西風の南に かゝるやあまのかぢ　史邦

とり知さ別さのくもや天乃川　八菊

五位の声ほうとふとふね天の川　汝村

あまの川かさまくもつゝれと　宇路

鵲

かゝと知のとゝや繪入の百人一首　許六

鵲や石火おりてはねもあぶ　其角

七夕

七夕や糸引ゝく北斗のとゝ　立圃

恋さまゝ頼ひの糸も白ひよう　一温

蕉村

手蘭盆

手蘭盆や老の涙の涙　桐雨

盆ふ死ぬ石とけの中は佛の事　智月

門並や盆提灯ゝ並ひ中　溪百

のけのまなりても蛾一盆ゝ　朝三

提灯

せゝらぬの柱ゝ人松のかゝ　釣雪

提灯ゝ盆ゝ西へ行　蕉村

せゝらぬや往来ゝ　穆良

高灯籠

人魂ゝ消ゝゝ高の灯籠ゝ　言水

不知捨ふ長老の門や高ゝゝ　百里

言灯籠ゝゝ松の木は月　北枝

ゝゝゝ松の木は月ゝ　長皿

燈籠

美女美男灯籠のひとつは明さ保て　そ角
天も花も酔て伊丹の丈ならろ　宗因
父母の新灯籠海まれ者ろろ　由之
灯籠のまてもおろ行るもとし　紋江
灯籠や三度かけぬ露なくのら　蕪村
とはしてて風ふ消さて切の絵ろれ　蝦蟆
灯籠ふ芋の長者ろ歩く歩行　左次

送火

おくて火ふ絶えて後者ろ移ふつ就　亀翁
送り火よりあろ足のふみちら　几董
おくりそれ山ろの月ろや家の数　文草

魂祭

稲の穂は実ろうなれ魂まつり
多生ろ冊ろの妻戸のおとふ何　芭蕉
亀棚や軟ろ血ふろれと花めるく　嵐雪
をとこ女ろ涙ねぬ者や魂まつて　鬼貫
灸して嗜しも亀ろ涙明て　知足
芋の葉ふ風の吹まり亀ふり　史邦
魂棚ふ質をおくしえる　徐寅
ろるくろの名ハ何くそ亀まつて　西柳
たろ多まりる宿や入相常なくて　卓袋
魂ろろおり移とかしき白ひれ　調祈
山伏や塔ろ中ろふしはまりて　百里
ろ法ろて花ふむうふ夕ろ　沾圃
那　越人

柳絮

蓮飯

蕙まつ味なき山の木の実う那　湖水
あまはゆつ舌の苦生ふ蕙りう　来山
蕙ふあり門のたう食の祝ととそん　其角
待たつる際ゐやあれうあるあり　希因
世の子は好こもなうて蕙まつて　乙由

糊経やこの曉の閼伽おみ川　其角
うな経や世ふ法ほうつ坊主ども　焼外

文月やあてあく炊く蓮のめし　季吟
朝飯ふあてゆることとの飯　里山

墓詣

生身蕙

盆の月

えーつも孫子とありて墓まあり　去来
銀を罪のたうりやうはあて　其角
夢ふよく仏ふ法爰ふ墓ふり　嵐雪
うらほんゆ家のうしろふ墓ふり　卓袋
三浦ふ九十二詣やはうはあて　乙州

かけ指や生精ヨ昊の袖ふつ西　一鉄
ひさけうは者所のいたをうる　彫棠
受うつ死舌とうゆ生舌魂　百里
渕明う隣あつめやうきゆなま　其角

かつても焼火くうしまの月　蝶羽
おりゆ縁と鶏ふきう盆の月　含呫

躍

踊子や古町五ふかけむる　宗因
をとり子よあをい畠の草ぬく　去来
川ぶねとりて江口の躍この角　肅山
おりのくと紺ゑ深くとぶとりあれ　尚白
食の湯の汗ぬ出る踊うた　李由
けいせんは汗臭くなれ踊哉　木導

西瓜

あつしても公はれぬ西瓜哉　歌川
月ゑりとりてめつる西瓜哉　嵐雪
裏庵や西瓜ゑなるふ物の本　曲翠
猪の鼻くをはうを西瓜う那　卯七
ちろくと西瓜切るり秋の風　陽和

花火

小屋ちと下花火の音は割る音　其角
おのうきあひ夜更て涼し花火毎　且水
西雲の遠のうちうる花火うれ　てふ
追出して千秋樂ゑ花火うれ　附風
りのくよ花火おそれ涼ちゑ　笑稚
ちうの戸い善流うトて花火哉　序令

残暑

ひやくと壁とゑうて昼寝哉　芭蕉
朝も秋夕ぬも秋のめつさう那　鬼貫
残ちちいのねゑの暑ゑの京　游力
下掌はめうゑ残るありき哉　李由
行くものうたりかうれる猶暑哉　奥素

相撲

雨降る夜忘きて祝ふ角力取　許六
上手なると名も優美なり相撲元　其角
駕うきやとこのたまふの取おくれ　蕭山
角力とはあとふ波とを砂場う郡　亀翁
投ぐられて笑顔中はしれたまふう素　勝定
小相撲のまくろのく猪や藪ちうち　尚白
お撲元のくくふ著なり蚍の声　木導
なりけるふ灯籠うちけと角力北　朱油
初秋や親ふるるまーすまふ元　米窓
おもるけふ物うちたくる角力北　春幾
山くけのふ春よゆくるるふう素　盛弘
小さくくとわうひと名素角力式　秋之坊

穐風

秋風や藪もそうけも不破の関　芭蕉
あくれけるまこほちくよは秋の風　鬼貫
飛り木の糸をいるるやあきは色　嵐雪
十間ふも小粒よなりね秋乃風　許六
ゆうふこと跡こもこそあれ秋風　初候
雀ふは髭もくゆもや秋のうせ　式之
焚くくての食は丸ほひやあれは風　李由
ちくーうもや穐ふく風の袴ふひ細　四睡
渋壁ゑ仏をふまりは秋のうせ　程巳
草ちりの裏めうふーや雨れは風　北枝
木の股ふおちはく鳥や穐のう雫　曾良
きやかくとふをあやはりて秋は風　沙明

早稲の香に沙り衛へきり畑の風　湖雀
秋風や我と板戸はひらくおと　岩翁
輪義のわらりもくるやや秋のかぜ　毛紈
秋うせや二畝くるそこの福させ附　游力
あきうせやまこ四五尺は枝乃先　汶村
秋の風むしの声くあわせ来て　乙列
夕ゆの賣をかくるあきの風　卧高
ないき風やことし生の子うも吹　来山
冷酒と止まるうき耳の垢と迄　言水
あたうせお耳の垢と迄　去来
秋風や草を食れく馬の髮　希因

月ふ入

風ふ月の入るうの文月の寄るしこの那　負室

扇置

ふせとても常なる妹のあるきうの日より　百人
ゆメ書もつるはうのなるる我　横船
　　宗因

捨團

源草の秋も仕入れる團扇うも　嘗角
捨うちれしあておうん窓のあ　浮流

初嵐

そうあしゆとうも青し栗の毬　芭蕉
初あらし鬼は毛並ありそうまり　箱深
あさ晩の腸ふむうゆや初あらし　珍項
辻賣は鯉ひとうゆやうり嵐　野坡
ひくまうう人水のあうゆや初あらし　沾德

露

寒かうく釜ゆ蔦落て見つる
志の寒とまつて寒さそや起さそや　素堂
朝うほゆおくとへつゆのたまみる系　鬼貫
公露のちくけ仕業や淀の月　宋山
たゝ世は間や浅茅ゝ系く客仲履　言水
きのつゆハ仏くゆ草のつゆ　甚角
葉よりたゆふりめゝふゆうや雫れ音　之白
夏業の照のてりてやあきのたゆ　嵐弾
古御所や雫日に残は名の搗　雪芝
芝ゝさは世西ゆちゝゆる音ゝ那　西邑
市人のすのうちかゝる露の中　千子
　　蕪村

霧

俳の歳入

二百十日

霄間や雲れ手しきふ明海原　甚角
霧くゝき歩ちゝゆ鶏の翼　遠蔵
舟くゝまゝゝ朝青ゆ木ゆ筆て　楚常
吹よせゝ江の一隅や月と雲　苔翠
あさきりや　水ゆくゝ輪の雫　毛紈
歳入のゝさゝみ箱より西風ゝ那　野経
やゆ入や木の間の月も跡ぶき　舟行
日照手二百十日は風をまつ　素堂
菜大根二百十日の銭暑ゝ那　李由
公羽　草二百十日も待ゝゝ　蔦下

稲妻

あの雲ゝ稲妻と待くゆるみ　芭蕉
いるはもゝ大佛拜む野中の角　荷兮
稲妻やおさゝゝきもし蕎の空　野坡
いるはゆゝのゝまして落るや山ぬけ　丈草
稲つまや海のおりてをひゝゝめうと　史邦
ゆる妻ゝ馬引かくゝゝ田面ゝ那　桐梨
いるたゝゝや周の鏡ゝりのかけん　氷花
稲妻や折ゝ藪のひまゝ見ゝ　湖風
いな妻のはゝゝゝ房ゝ戸板ゝる　幽子
ゆるたゝゝや池ゝゝ面ゝゝ霄の園　卧高
稲妻やゝゝはゝゝゝゝゆるせゝゝ城　素洗
いるたゝゝゝ行先くゝの小家ゝ　孤白

野分

ゆゝへかゝき雲ゝ祖ゝゝゝ野分ゝ　未山
日枝高ゝゝ吹かゝゝゝゝゝ野ゝゝ我　言水
ゝゝゝゝねちりゝゝ草の野分ゝ　立志
野分ゝゝ雲のゝゝゝゝゝゝゝ乾ゝみ　探志
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　正秀
おのゝゝゝ草のゝゝゝゝゝゝ我　圓爽
鎗村の帰りゝゝゝゝゝ野分ゝ　琴風
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　紫友
冷ゝゝと朝ゝゝゝゝゝゝゝ　支考
雑の尾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　前口
河原を野ゝゝゝゝゝゝゝゝ　圓水
吹ゝゝゝ野分ゝゝゝゝゝゝゝ　之順

早稲

早稲の香や分入る右は有磯海　芭蕉
夕稲干さやかに見えそむる山のあし　去来
河骨のかくれ白しや早稲の穂　牧童
こせのまや田中をゆけば弓矢法　支考
夕暮や稲こぎ人の見えそめ　松嶺
臥し屋を出るや早稲の刈株　負室
早稲の香や雁ひ出さるる菴は舟　丈草

落穂

落穂拾ふ翁の蓑を捨みより　鬼貫
あちら穂ひろひ日あるる方へ歩るり　芝村
辻堂へ投込ゆく落穂この糸　青角

木綿取

綿弓や琵琶ほのくきむ弁の奥　芭蕉
簑ほやして窓よりちらふく綿は樫　孤屋
里の子と曩さらふし居る木綿哉　湖水
新こきやうより散くあやくとり　泥燕
日あたりや綿とりまろと簾きそ　富豆

田刈

稲刈やその田のくしやくしや所　許六
行ぬ足の跡のみぞ一刈田哉　何之
日ふるし稲刈未だ調ぬ　樣青

晩稲

晩稲田の穂そるうつや幸通り　遠水
ありとして案山子もこける晩稲哉　蝶夢

法さう寺

さくらみ箱さらかくとそ移や冠石　山店
拝ととて烏帽子落とそ冠やー　太祇

逆峰入

七夕清う侍都かけすり逆の峯　淡く
峯入や雲をまつ毛よ咨ちを　汶上

後彼峯

彼峯さくら咲う月こそ西まあま
風もなし紅の彼峯の紅葉うし　宗因
鬼貫

初潮

初潮や細いとこ浮ふ帆うけふ孫　嵐蘭
うりちもも驚くけるに嶽衣我　和及
けうう汝や小松の中ま月の新　乙何
初潮や追られてのわる小魚我　蕪村

八朝

八朝や二日の日をまこれそとを　宗因
八朝や脚は鶴はよ花樹くふし　乙洲
八さくや桂は算はそちり是ル　野坡
八朝や踊りー足花かーとまれ　乙山

弱追

寺くや清ちかとるこはむと　コ斎
ゆうりゆる函谷やくふ駒追人　甚角
菅公やことふ自ふくふ駒むと　秀風
弱むうしちとゆゆくや嶺ふ　蕪村

駒牽

駒牽の木曽や出ふくん三日の月　去来
京立を皆こは初きの戻りの下　浪花

放生舍

うれしけれ羽虫とるうり放しとそ　桐雨
海老稲も実入り頃とや放生舍　史邦
人とろろ多そ形つめり魚そなり川　露川
先いろろ新ふ達へとやそ形し鳥　鬼市

案山子

笑まいといふろ案山子の腰刀　玄素
はんりと刈さる跡のかしこ形　諷竹
えそそそせ出来ふてあるかし光　呂洲
山端ろ案山子陸くりて笑ひそ　重五
ちる人なりてひろはしかしこの那　惟然
物は音ハ多春む癖とかしこれ　雲口
しかしかしてちるハ案山子光　光山

鳴子

そのさるを後田守らぬかしこる　金峯
世の中にくえて引ちる案山子ふる　如泉
一ト夜さもゆるして森せぬくしこれ　卯七
ちるんほりと山田のかし付西ちそ　和角
鳴子曳二日の月もちろろう那　言水
七十のこしもそそそちるなる子ひき　其角
豆酒の敲ろ門田の鳴子ひき　野坡
なる子引おのろ豆森をおとろきね　乙由

引板

山陸くき日の出は虹や引板の綱　亀翁
ゆま蔭や浪呼子ちるひとけ音　蕪村

落鮎

村くの森こゝろ〻ぬおとゝ〻こゑ　芝村
小山田の〻落を日やたとゝ〻ふ　春祇

渋鮎

長めしと市〻ん鮎の暮のさゝ　杉風
渋鮎やいつと栄せ夢の〻船　寛満

落鮎

落鮎の水よめうはうゝれ世〻ふ　勇松
追落を鮎のよゝみや石のおと　横几

初鮭

鮭の付宿を豆腐れ雨夜　角
〻ん魚を泊居も客とゝれ〻ん　素堂
さけ釣んてさゝ波のゝる川辺〻れ　寒玉
〻ん鮭やかゝてゝ荷物の宿る〻ん　園木
　　　　　　　　　　　　　　　　沾徳

菊簗

ゆゝくゝと煤のゆゝくゝやうゝき簗　乙由
〻の〻簗の奥ふ波〻ゝやゝ〻れ簗　太祇

すゝき

ゆゝふ雲や雨を〻ま〻ま〻ま〻ま鯨〻ゝ　野坡
〻ゝし〻ゝん麻簗〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ　昌長
せゝと泊る〻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ沿　半残

河鹿

あやまりてきゝうゝゝゝゝゝゝゝ河鹿〻ゝ　嵐蘭
〻ゝ〻ゝ〻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　園友

沙魚

袴〻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　巴山
粕買の駒〻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　朝叟
四〻〻舟〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻　菊白
沙魚〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻　蕪村

升市

二ッ買欲とおもへども升の市　一嵐
むつましく遊ばんと升は市　作者不知
市の月ろふハ九合の月もなし　涼岱

新そば

粉そばや夕紹伊映を拳ふうさ　支考
ちん蕎麦や名を通ほ唐辛　夏晴

砧打て我ゐきろ世よや坊ゝ法師　芭蕉
おりひめまつ恋る名をうつ碪うゐ　鬼貫
相槌のうちうつて明るきぬぬさう有　山川
きぬぬと打人も裸くらまれけり　鋤立
手掛の紙ふりをさまるきぬぬさうれ　去来

擣衣

鼓やらきぬさやぶたゝめのおと　仙化
つろ馬よ拍子ちゝとゝ孤ゝ砧の素　巴風
霧かゝとて遠くなりくるきぬぬ哉　破笠
旅人ゐ村とことろ孤寂ぬさう有　全峯
とのぢてなくさみよう川きぬぬ哉　一笑
山里の孤やさふく嵐くきろ紙　是吉
生柴をちよろくさせてきぬぬ哉　千川
宸ちゐ起く酒のむきぬぬこう邪　昨應
さびしさゐ寂ゐおりやも砧れ　孤舟
ちゝ孤ゐもかゝらね市のきぬぬ哉　立志
紙ふりぢゝ現ゐつよきぬぬを哉　七里
三日月の嶽よ道の孤碪こう有　万声

漸寒

野童

やゝ寒し早稲はひんしの角芽立　北枝

足くゝやき朝戸はおとゝやゝ寒さ　乙州

やさしく人をうゝかふ秋ごゝろ　乙州

朝寒

朝さむやゆをりみそめて菜の花　風斤

あさ寒み酔のまぎれよりつゝもや　北枝

朝寒や関の矢ぶきのひゝくき　蝶爰

病人と清水ゆ涼れ秋ごゝろ　太草

清水ゆ菱のうきたる夜さむかな　許六

松うせの秋酒をさましと秋ごゝろ　支考

ゆゝ多ゆゝ猫もかゆゝとよごゝろ　甚角

夜寒

清水と夢さめてよゝ清秋さふゝ　来山

あてもなきこゝろを夜寒のおりひしれ　諷竹

秋は坪ゆのいろりよりくる夜寒の角　李川

まゝこ一を荒しくまてその秋寒うれ　仙化

秋寒さや蒲団ひとつふたつれろり　百里

客人の夜名おしけける秋ごゝろ　程巳

打鉞は音やよさふの障子こし　汀芦

まゝこの里ゆ川の秋寒の火打栽　其流

矢くゝて月もなくゝる夜さふこの角　蕪村

木はくゝゆ鼻紙ゆる夜寒ごゝろ　風麥

十煙ゆ袖を氣ゆふ秋寒この那　李由

新酒

新酒の松をしそおりふ明石米　宗因
早稲酒や稲葉よりとり出を嬉うりと　其角
風よりの付くく吹より来ん酒うる　その
新さけはきるしも青北月又この事　酉花
五稲酒や売倉ふかけし牛の筒　虚谷
新酒くむ山盃ところなり砂はう人　亀翁
松の葉も紅ぶとりて新酒うる　渚九

露 附酒

袖はきふりつる上雲や露赤くなる　嵐雪
菊の香はりのよはく日や露附酒　希因
爰元のいきやとくいて露しくれ　涼佛

秋 空

秋酒や伽羅割るあくこの錯蔵し　秋風
くちさるくるのうの酒　野坡
炉のあめ窮はる尾の赤くり秋の酒　孤衾
松のなふは地よ立ちくふ秋の爰　式草
あきくさめやふる底の茅を階渡る　墓村
秋はる胡弓の糸よなく絲うれる　暁夢

穐のそら尾上の松ふとれより　甚角
樫はは木の実もさらもや秋の空　玄来
絲くりなたそ走ぬや秋の長　太草
風の根を照はけくりあれの空　卯七
上ゆくと下くるもや秋のくら　凡兆

穐の朝

芭蕉ふるやまこえうらねの秋の霜　指善
うとゝ赤き落のかしらやあきのこゝろ　吏明

長き夜

九度起くるも月は七つ　芭蕉
ながき夜を疝氣の祈りて猿蓑哉　鬼貫
秋とゝゝの長さ成りとゝの山　丈草
蓑のこれ秋もなかばの一　猿蓑
人ゝもあるとつ長き成くゝ式　北枝
栗稗を夜長ふるうん秋こ身　沾徳
腹ふりて秋ふる夜の秋や萩の声　野徑
なかき夜をむしの成ふる源藤氏　恕誰
もちきよや剣の声も長根者　草士
蝶生

妹の暮

この道を行人なしゝ秋の暮　芭蕉
あ女は暮祖父はふりこの子の子そ　甚角
舟多原名所の秋は夕ふる形　嵐雪
癖ふかりてら見しや秋の今朝ふ　千春
ふる從尋尋孫よりそ秋の暮　玄梅
蓼の穂ひとりこゝろ秋は見　程巳
あきのくれいふくかくるゝ牙哉　荷兮
馬牛は眷もさゝれし籠の昏　松窗
夕ふゝ捨へいのもあれとも秋は海　國友
あきの暮留ふる法ふれて塔りふ　山店
人を仮居ふりすこゝや雑は昏　楚常
秋は人ふふり合もなゝ舟遊山　紫紅

柿

昔やし今やらうたくあきのくれ　鬼貫
籠くるくさしき炭の白くれ　昌碧
石切の音も分きり秋は人を　傘下
谷川や茶袋そそくあるのるる　益音
僧の居は徳のそそれよ秋は昏　不炊
鳴弦もあきてもかくらと籠のくれ　車庸

待ぬしや梢を過るあるしあり　玄来
帶蕗の樹は音きく涼山るる　素堂
詫柿や障子ふ物ふ夕日うけ　文草
撰はるるもそをふ供のよりとそ　利牛
渋柿のつるまて枝の住居の家　龜翁

葡萄

月日は栗亂蕭萄かくれ甘露あり　甚角
酒作法蓑の法きやふたう棚　史邦
松はくるたしめ淋しき蕭萄くれ　作者不知
さるもなくく人をる姿とうかれ　打臨

梨

今宵うる梨の帶とく男部屋　沾德
青梨やう夜もつせハ秋の水　旧國

若菱

かけるをを小屋別ある若烟艸　龜翁
迷くへ市日ふれうるるる粉　晩山
若たくこ既ふ一ふの灰と形り　龜世
蘆くく下ふ床しきるるとうな　芝村

一葉

水の蜘一筋あふちちらくおうきぬ　甚角
なる秋のきりきぎすこうちる一筋ふ栽　ちて
角丈ふハ相の落しは二筋ふうる　甘泉
相の筋や落るところをまゐ居ハ　苔蘚
庭掃くそはくひくとと一ふ沈　風徐

柳歌

屋ちいて生るや　ちふちる柳　芭蕉
月初と月柳ちり残る木の間より　素堂
主すの妻の用意高や数り毋るき　桃隣
行馬の笑ふもちふ寿こう井　李東
さひしきや花井殿と数る寿　嘉中

艸の花

七草ふ酢味噌のうえて秋の色
艸の花ちりて老母筋のこなりうり　吉水
秋深し人切ち手ハ草のそ羽　東滝
草ふ花　愁ハ妹となりにきり　風國
我うちよ咲てふ母ちし筋の色　暁臺
五花

女郎花

ゆうんさよ雨ハ後のをとこうえ　鬼貫
けふはしの賀ふ花や女郎色　杉風
女郎色のとこうふ筋ふ　野童
松風の里ふ汐くあをとこうえ　茨口
はちふくと露けし層而の女郎色　乙州
ふとうをさよりや山石の女郎色　秋之坊

木槿

道の邊は木槿を馬ふ喰れけり　芭蕉
むくけ垣花咲ふるふ森入まで　観水
わくゝと木槿の花はこゝ迄咲　土芳
川音や木槿さくく戸ハかゝと起さ　北枝
はくゝろくね里は木槿の白ひこの家　四睡
一くゝと草紙やゝ志あはむくけ垣　素牛
いくつの間ふ斧戸の木槿い咲ぬん　如柳
手はゝゝ色の絶は栗や木槿垣　見壽

葛

布ふ煮て あまりむさゝう葛の粉　治德
おそろ〳〵と谷をかくるやくつの花　桃隣
散くゝ花もうゝみぬ葛は西　北枝

嵐尾草

嵐尾草のよゝそも御名ゆ久ゝ敷　鬼貫
みそゝきやゝふ浪ふ浪ふ沙ふ闘　其角
嵐尾竹や月よかくらさる家も色　曉臺

藤袴

夕日さゝと篠をあゝ一ゝ茂ゝ生
西のあ〳〵いゝゝや初〳〵く茂袴　柏兮
一武

蔓珠沙華

かゝゝ〳〵やみ猿のゝあに蔓珠沙花　其角
悪死ゝふ契ゝあゝくゝんゝもさ彼　寸木

男色

黄昏を汝もくゝ稚るゝ男色〳〵　麥丸
秋の野ゝ〳〵一人の名ゝりとゝへ〳〵　半睡

朝顔

あさがほや酒盛ちらすねはちうかな　芭蕉
朝顔や昨日ちるとしらぬ人　甚角
朝顔や夕ゆふ藻の結変　去来
朝顔の白きを露もこぼすなり　荷兮
あさがほや赤一輪ゆなりかな　舟泉
あさがほや霜は投げりの焼わたり　呂房
朝がほや垣ゆ垣の這あまり　杉風
朝顔を咲ちらすくるまをあるほ　北枝
あさがほやきのふ五つ六つ　牧童
朝顔の夜よのとけ〳〵鶴は声　甚糟
あさがほや雲の日新の今ことし　蚊足
朝顔を人ゆゆせぬる夢くさ　山川

芙蓉

あさがほや初こしの水ゆ残はり　胡及
朝がほや出ゆくゆ笠の運　来山
朝顔の種とふきの苔の茶　一笑
枝ふりの日にくかくれ芙蓉　芭蕉
百合ゆる芙蓉を絡るいのちの茶　風麦
ちとあるゆ小刀もゆ玉芙蓉　治徳

海棠

まねくもゆ紅の仏や秋海棠　支考
秋海棠ひるを松ふる人ゆ　素堂

秋木瓜

秋好の妹をうり秋木瓜　韋吹
ちゆんとしく手草の中に我木瓜　路通

萩

萩原や一夜ハやとせ山の犬　芭蕉
蒼ともみえを霧ふり庭ハ萩　甚角
夢雲のあしらを萩のあひき我　土芳
朝露ハちりぬと萩の使ひ哉　その
萩さらふ麻のかりほ哉　来山
萩ちるや祇の子あらふ水　牧童
庇圃の蘇やかりあと稲の端　猿雖
とりとめぬ野の夕ふりうれ　忍市
ユふ庭ともあるし萩ハ露　車庸
萩よ来ゝ立ふ雀ゝ　兩邑
村雨や萩の根よあ蜂の声　冷袖

萩

蒼麦

萩の穂や弥を佐うむ屁生門　芭蕉
友ととれ萩も文車の萩のこゝ　鬼貫
雨ハ日や萩を前ふ庭の萩　卧菖
あるうきの焼きー萩乃しら　岩翁
萩萩や春の季なふ梅さらら　貞室
蒼麦ふまゝ荒てなを山路うる　芭蕉
やてんよ捧ふらせんそはの花　宗因
孤火ふ赤ふけてるや蒼麦ハな　荒雀
暮ふもて盛うせけりそはのそ　兩汁
さん蒼麦やう旧の木芽大根　閤如

稲の花

あつさとも忘のきはけりゐ稲の花　游力
七度の花のはつるやゐ糸はえ邦　智月
品川をとゝまれてさゝゐ糸はえる　峡水
吹ふゝね風の目まゝや稲のとゝ　巳百
蜻蛉の立居ふ敬りねいねけ花　遥里

番椒

ちりこ本も紅葉ゐにゐ唐ゐ辛　宗因
番椒茄子ふあけもうちゐれを　耒山
ちゝ人ゐの蜻蛉のやとりや番椒　米盌
玉虫の羽ゐとゐけやたゐかゐ　探志
ひゐゐ花ゐ人ゐるゐのや番椒　野坡

糸瓜

佛ゐも足ゐ剃ゐ糸瓜ゐれ　鬼貫
ちゝ一ゐ糸瓜の糸も捨ゐ花　南市

瓢

針立の抜く這入るふゐをゐ角　許六
森をゐふゐや起ゐとゐも青ゐ人　季邑
ふゐ人ゐ賛ゐ瓢ゐ嵐ゐ茶　亀世
ちりゐゐを音沈淀ゐ瓢ふゐをれ　土芳
さゐ一ゐのゐふゐ瓢ゐ人ゐ瓢ゐる　風草
夕顔の花ゐふゐよゐねふゐ人ゐ茶　和及
竹の声許由ゐひさゐいまゐ青一　其角
蔓ふゐや僊ゐゐ落る瓢ゐふ　希因
頭れの目皇ゐかきゆゐふゐ人ゐ那　蕪村

蓮實

蓮の実は秋ふかくなりてもさまざまの
ものゝとゝとゝのゝ

嵐雪

蘭

らんの香や蝶の翅ふるきものを
盗みくる蘭や白食の餐の下
秀ゝれ冠のゝとゝ形ゝ蘭
よるの蘭あふかくまとゝ色迫

芭蕉
嵐雪
宗因
蕪村

芒

秋風ふ巻紙折らるゝ芭蕉うる
ゝゝれて芭蕉のかけの小僧哉
家ゝ屋ゝ有る庭のゝ世成れ
雨ふ降まゝゝ芭蕉の雫ゝ角

凡兆
遠里
困之
汐村

花野

世の中をかうゝゝりん花野ゝ
ふくかゝね風ふ花野のさゝ行れ
秋風のまゝゝゝ行野の南
馬道もゝりて引ゝ原ゝ形のゝ
山伏の火をきりこゝ花野ゝ
しきあゝく牛のゝ花野ゝ

胡故
泥燕
卜志
探泉
野坡
野徑

桔梗

野ゝゝゝ花ゝゝ衣きき毋ゝ笠
秋行ゝゝゝ桔梗の蕾ゝ
村雨やゝゝゝ沢桔梗
桔梗ゝゝゝれ花色ゝ打佛堂

德元
左次
幾紫
芸村

薄

角文字やいせの野飼のくるる芒　甚角
燃きれて蛍燭をなつく虫芒うゑ　荷兮
寂さあてても起ちうかう萩落　路通
花をうえ戸ゆるされし夜を我　牧童

紫苑

抱おこと雨のそゝき狀ちうる虫うれ　苔嶺
穂落をさそう紅よりタ色畑の畔　芦本
ゑのうくと目をさそひう・蔦ゆう有　野坡
おりし移き鳥あれこそ名落う角　鬼貫
まゝくたゝ人ゆなしうき芒の那　素山

野菜ゐと折くえおうさと紫苑ゆれ　笑林
なつうしき紫苑の下れ野菜うゑ　蕪村

野菜

重箱ゆ花なたうきの野きくうゑ　甚角
きくまくにうこ咲まうゆ野菜う有　句空
り道の野きくの果を湊可蕪　柳宴
菜刈は道くとゆとゆきくう那　露川
松う根ゆ多代をあやう体蕪我　永参
根を石ゆこれゆ川原の野きくゆ　亀翁
角石を拾ひのとせし野菜の角　尺州

鬼灯

鬼灯やもとゝ蓋かくと娘の子　呑水
ほく侍きゆ傾城のふく網子うゆ　進寿
うゆゆ有う鬼灯吹くや猿の貝　沾荷
鬼灯や清水の女うせうゆし　芝村

鶏頭

鶏頭のひろをうつしをや金まつら　丈草
岡寿を茶もるこね茶ふ鶏頭　史邦
花をうり日を待うけて鶏頭花　野坡
鶏頭や紅錦繡の帳を張る　林風
タくれふ物を散らさん鶏頭花　安信
鶏頭や唐のかしらの夕日こそ　亀世
鶏頭を踏うてふさやうの角　文鳥

蓼花

茶もうし佐野のあうりの蓼屋敷　其角
盞ふさとうを噛むうり蓼のさ那　琴風
捨鞭やほうこうもさもるたて乃花　堤亭
三経の十歩ほどくるあてのうち　芝村

稲

稲雀茶の木たちうりや逃ところ　芭蕉
い稲うり川く田よ出むうやうあぬ我　凡兆
文は夜や稲こく家のうちふ声　万乎
稲塚ふ高汝ちうき川ふこの南　横几
ときうり稲ときうり寄もかうりうり　ち線
稲村の路をうてくをる雀うふ　狐屋
い稲といふ行も手まかくをや姉うの門　史邦

蘆穂

一本の芦は穂やせしぬせきこの系　防川
引手の跡よ起こうは穂芦か那　全峯
あしの穂ふ着うの川方や岩の脇　去来
芦の穂や解せをやとひて折もせん　其角

尾花

白玉の尾花ゑくなりぬれきろも　重頼
こく波や穂よ出ね先の尾花川　楓子
山伏ふ鼻うまれしふ尾花ゑれ　貞室
　　東朝

菊

起ゆふ菓ゆのなり水のあと　芭蕉
菓をきる跡まろ〳〵ゆめるろろ　其角
霍の声菓七夫のなろゆこの菓　嵐雪
きく〳〵安く毒根のかさりや山畑　去来
棚下にのろ夕や菓の新法師　許六
菊とろけ奥ゆる秀の曇ろ郎　杉風
椀かくの見ふれ行屋や菓の茶　李由

元来やはと岩根のきくのそ郎　貞室
御定の外うやきく世まさり氏　宗因
行馬世ゆとふ花形〜菓の茶　鬼貫
酒ろゆふよとる波ろや菊世花　梅盛
菓畑先人さく むとあるーこの郎　正秀
さろふとに垂く海へるや屋の菓　幽霄
百菓も安〳〵や茶のろ世南向　嵐竹
ちふきくのえ而ゑメきタをろ郎　諷竹
塗物ふろろふ彩や菓のそな　木導
菊の秀ふなく〳〵山系の古上戸　北枝
きく〳〵粒とて〜佛のとてかふし　千那
菓のまつや古紀雑波の呑子とゆ　千川

赤桔

うふ桔やそれとけ赤きのふ山　毎閑
赤桔や魅とらみめふたうけ中　雪子
うらうまつや豆腐とうふ門の桶　青峨

烏瓜

保戸ヶ谷の夕日やうつる烏瓜　亀翁
市人の声ものあつとかふを瓜　柳雪

蔦

蔦かくるとは高きのつもるや牛の書　野坡
蔦の葉ふや貝売ふ山石北間　臥高
石山は石ふもも蔦のうふもおりて　乙州
蔦うはふふ月まつ足ふね柳ふ　里東

梅もどき

赤そしらや温飽ふつくの梅もどき　之道
玉のよ寄ふふ玉とおくし梅をとき　乙州

ねうこ

うたゑ玉のねうこ角やかつふり　専吟
朝うふやねうこの蔓のほとうれを　及肩
うましはの甚ふ余りうるねうこ哉　蕪村

芋

煮て石高野山のよりうて芋　宗因
芋ふ実の入るとを三日の月　鬼貫
いもを植て西をきく風のもうふ　其角
秋来ても矣まふ出をいもの蔓　西鶴
芋を抱く酒ふ対なけくふの渕　桐葉

間引菜

間引菜や有さけわ〜れ釜の焚口　曉臺

まひきなや援ふそおりふまく子立　一邑

刈萱

刈萱や露ぬちぬれの草はふ〜　牧童

かるうやそあふじしれ跡もよろそり　巴丈

木槿

木槿や六尺四人かろうをと　其角

ろくせいの花ゆ寅ろふね夜を比　爲有

木法実

賣酒の一樹出すぬ〜壮かや　西瓜

志もの朝梅擅の実れそれそり　杜國

きくしーさや吉野をかやまおりふ舟　桃隣

椎の実

用事ゆ〜椎ゆる里の松茸よろ　其角

好をあう〜ふねや椎乃九折　三翁

村雨ふかひあるうけや椎の音　岩泉

榎木実

下紅葉榎の実をちろ〜白ひ我　其角

実なほより油ふ焚り体榎木比　路通

栗

生栗を拾りはちろ体山路ゑ　其角

毬栗やまふさ〜けーる法の場　嵐雪

栗の花のあ〜ひさ〜のよ栗の上　惟然

落栗は菊好きかく体嵐ろ那　透雲

毬栗の笑ふも淋〜秋の夕〜　李由

熟柿

木伝ひて完然歩む熟柿の音　丈草
小上戸熟柿の林かくれさり　一蜂
桑の常くさる迄熟柿哉　百花

紅葉

山姫さくこそさ表やちり紅葉　甚角
白くれりみちの外へなちの町　鬼賀
ちくふね人とりのいひてくる紅葉哉　東順
肌をし牛切山のうとをみち　凡兆
りみちこそ火打もうつを染火縅　野坡
山川ふいはりかくをし紅葉の角　如柳
公あんて指よりみちを志うせちり　秋之坊
てりあちゝ夕日春生ちり紅葉　野童

茸

松の茸ふそ火まろうけ蒔醤油　甚角
ちち木とるおはしめられを榎茸　嵐雪
柞落ゝ松茸こそね白ひこの茸　奥児
松茸や囲炉裏の中ゐ拂くる床　園友
ちり茸の裏より拂ひ日蔭ゐ那　沾蓬
まゝ茸や番をも絞しを良ちゝ　為有
紅茸ふ明野の北丘尼なゝ　木導
はり茸や丈きゝ声はなちり　吾仲

茸狩

茸かりふ日いまさ高し岡の雲　水奥
たけりや黄蕈ふも児ハ蛙し良　利合
茸うりや人ふちゝ鳥は先　去来

虫

蟋蟀とうとうとや風ふく夜の虫の声　鬼貫
今宮の虫とうとうなり侍ぬ　来山
暮はやと芭蕉ふるく虫の声　許六
蓼穂の売もくさうるやむしのこゑ　壺中
むしの音や関宿舟の蓼栗の中　養浩
燈明よむしもよるやや比叡の山　藤葉
虫の声や木綿布のわとくるま　汝村
玉根まくは暮風は中や虫は声　李由
生れ侍く草のまこうや秋のむし　文鳥
蟬の音や株やとなる菜の日はよろ　汝村
ちり秋は息のあとれやのとは塀　樂蜂

蟋蟀

秋草ふ仏のゆうりと黒き蟋　万子
いろ〳〵よくもとく秋の小てふ哉　牧童
あきの蟋一ぞふと散るや爰の中　桐

秋蚊

秋の蚊や血よ吸ひこれる酔こころ　粛山
秋は蚊や友の減のを泣けり　只言

蠅

蠅打をまこと捨ぬ浦のあた　泥足
あきの蠅ふくふ高せね日向れ　史邦
秋の蠅ううをむやく足せこと　秋之坊

秋蛍

秋の蛍二夜ふるこころ窓ふくは　鬱打
月は夜ふるやうこれ秋の蛍北　櫂良

松虫

松むしふきうの葉をうれへ友もなし　其角
まつむしと跡さたまる新うの京　車来
虫とてとりるあとより哭けり　一髪
まつむしの夜ハ松の白ひかる　沙明

鈴虫

鈴むしの啼うたく啼酒夜うる　季吟
たく虫や松明先へ蔦くせく　其角
鈴むしよ客をかへさや廻り縁　凹凸

蟋蟀

猫よ貪欲しを蟋の妻ハ[illegible]　宝角
蟋やかうろうさまうく小半月　荷菊
我宿のとろきを啼く鄰う角　百里

蓑虫

蓑虫の家家しく野分うる　句空
みのむしは啼て枯木の風情こそ　淵泉
蓑虫を千種の花はかくしう那　鍬立
うのむしの蓑ハ雫や草の庵　史邦
みの虫や味ひるしと哭ふきり　芝村

蜻蛉

山の湯をまんまかくさや破れ笠　其角
蜻蛉や追うけてゆく泊をんな　汀西
幻の秋のゆくへやあうとんは　支考
蜻蛉ハ蟲とは笠の中　太草
とんぼうの巻をかゆる夕日うる　沾荷
蜻蛉のたうとねけうる廊下哉　斜嶺
日を斜関西の涉にとんぼうる　芝村

蟋蟀

床ふまゝにいひきふいるや蛬　芭蕉
さむ月や髭をさるきりゝを　其角
灰汁捕の雫やみけりきりゝす　凡兆
やゝ〳〵寒れば声をかゝを蟋蟀　智月
秋の夜や爰と斬ときりゝを　水鷗
ゝゝまゝや先くまゝくある蟋蟀　李川
引まけて羊に首ありきりゝを　乙州
あの声や露よむせゝゝきりゝす　従吾
賣家のあいさつありさとれゝ蛬　范字
なゝ聲やひゝゝあるの蟋蟀　幸坊
をゝれゝ穴ともるときりゝを　太州
常燈や袋あゝゝうにきりゝす　嵐雪

竈馬

竈馬　蟋蟀

月を老ぬゆひうまれゝは蟋蟀　耒山
古城や炭ゝなるおりゝを　鬼貫
さゝゝをさゝをひきゝる蟋蟀　舎羅
居風呂もりの入れゝあり蛬　希因
蟋蟀や竈馬塩ふるの淵ゝまゝ　越人
情出さや月の名殘を嘯くいとゝ　正秀
磯際の浪ふ蟋蟀入ばいゝゝ系　惟然
食のこと柚味噌の釜れいとゝゝ　程已
かまきりの鎌はゝひまり露の玉　銭芷
蟋蟀や寄引のこと萩れゝ那　北枝
うまきりゝ鶏ふ双むゝふ姿ゝ系　凡峯

蚕

秋もそやくくと蚕あぶと和み蚕　風國
刈株ゐ足引うゐはいゐとゝゐ　溪石
二条なは青田ゐかせ一条ゝ那　雨柏
曝ゐ衣引まゐはゐゐむいゐとかゐ　為有
綿の貧ゐ巻迄らゐ蚕この角　昌房
竹の戸の蚊帳ゐふとゐはくいゐとゝ那　仲風

蜩

日くゝじや捨て蚕くゐも日を　きて
蜩の声そゐみさの親のはと　弥五郎
ゑくらゝやまゐ人れゐる瓜ゐゐ　凉岱
ひくゝゝゝや松ゐ僑ゐゐゐ蚕ゐゐ　甚梅

渡鳥

浦浪や通ゝも交はゐゐり　去来
山端や渡り侍きゐる鳥の声　太草
日ゝゐ西ゐ西のゐとゐやいゐり　野坡
吹息もゐゐはゐ付ゐやゐゐり鳥　游力
聲ゐゐ迄小ゐるの中秋逗渡り　近之

小鳥

秋の野やゐかゐはゐ小ゐ鳥　虚谷
板葺や秋の小ゐるの歩行音　落梧
小鳥ゐゐは音蟋ゝゐよ板ゐさし　蕪村

鶺鴒

榎の実敲る鶺の羽音や朝嵐　芭蕉
ゐくゐゐとりてなゐゐ鶺の羽音ゐ那　一保

雁

酒買ふ夕べ　ゆくうの雨夜の雁ひとつ　其角
ゆくうの月ゆくうの浦は名所　馬莧
ちりぬ月や雁のちぬる茶湯客　風國
起きて見て夜明人なし一ノ雁　万平
一ノ雁も月ゆかしかるひきや　越人
初雁や比良ゆく追分帆うけ　木節
行ノ雁の友は行きさや奥の柳　惟然
ノの行くうまかくれや稲田の稿　北枝
鳥帽子ぬぎて白きのはる小田の雁　嵐雪
かまうぬの年ふなる所程鍋　去来
ちる雁も行灯ともはくうめと　落梧

鶴鴇　鵙　四十雀

せきまいの足ありとかぬ一稿の霜　芭蕉
いつ法ちまん鶴鴇の尾の翼うる　史邦
せきれいや雲土と稼る畔のうへ　磨盤
庶りゆもう見てとも鵙の草鞋うる　嵐雪
目を縫ひ百舌鳥もなる一体法の声　歳人
鶏鳴や木芳夜うれしまひねと　露川
此森もとかくこまりりとおとし　蕪村
老の名は北ありとも三ふくく四十雀　芭蕉
世の中や濁りくくて四十から　虚谷
かしこけゆ出てさく見まり四十雀　可吟

鶉

相の木ふら陰に啼なる塀の内　芭蕉
伏見あハ町屋のうらに啼く鶉　去来
日あたりもせぬうらにうるさく鶉う哉　正秀
馬夫よみみ寄られてなくらはら　臥高
うの鶉時計の六ツもうつせもり　史邦
ゑく啼ふ夜を待めと鶉う那　山店
旅人の小判ぬくたりるうはらうな　園友
栗ハ穂をこぬ附や啼く鶉　支考
中為も落て啼くうはうう那　露川

帰燕

燕もお寺の太鼓かくり　うく　其角
菓屑もとかさと啓るつくあ哉　原俳

鴫

刈あとや早稲うくくの鴫の声　芭蕉
石打て立さはる鴫ふあられ　言水
あくふうの姥鴫とらふるなるう　亀洞
鴫突の行新長き日あくうく　児竹
泥龜の鴫ふ這寄ハ夕ゆう那　其角
鴫細ふ風のあくこれゆふ色う那　湖舟

鴫

鴫の行方こうれて山女の素　李園
ひよくりやくふの日和をたくる声　荻子

鶸

居りよきふ河糸鶸ふる小菜畠　支考
高土ふに鶸の啼日や雲ちきれ　珎碩

鳩吹

淋しさの鳩吹ふくとうるおい
鳩吹や淀撰糸の蕎麦そばけ　野水
そとふくや太山いくさき至下　珠頂
　　　　　　　　　　　　　　甫山

鹿笛

鹿ふえやさをを狸のたちつゝみ　徒元
うしなうふて鹿よ笛ふくさんろ哉　大山

鹿

小男鹿やあそきき声より此流れ　其角
啼鹿を推の木のるふえ分さて　去来
北嵐峩や町をうち越鹿のこゑ　丈草
朝鹿の身姿ひ高し堂れ様　許六
鹿の目れ初日にむふ高根う南　李由

あそれさや日の照る山よ鹿のとゑ　万乎
番の火をうのようふ鹿ふや鹿の形　探志
ゆくさをて道なき鹿の生向れ　不障
さひしさや尾うくうる鹿のうり　木導
鹿啼くやとんと波うの声は跡　野坡
元山の杉をえんせうり鹿のちゑ　知足
尾をふるなくや夜明の鹿の声　風瞳
かんせたる四足をうゆる小鹿こう邪　汝村
ねるまひとふうとまとや鹿の声　蘇葉
膝えんせてはくそふ鹿よりみちる　半浅
吹うふに鹿をうの山ふ鹿しく　白空
三絃のさを鹿や絃ものかいらうひ　季吟

行秋　芭蕉

行秋のあとさのゆりや青密棋

切あきの細くくくをまうせうり　越人

ゆく秋よきるあとともなる袷う素　牡年

ゆくあきふ数めるる家のあしるれ　浪花

行あるや晩日のくるる星の影　その

切秋の四五日よりは藩この南　丈草

行のきや古敷てあくる風の神　東以

冬近　ホとゝぎすきて横うら行あれそ　乙由

そゝもゝや高足あをより九十日　耒山

冬近し附西れ雲もたくよりそ　蕪村

りのいろ〻雲い去られんを近し　撐良

古人續五百題並發句集

冬の部

初雪

初雪やうけかゝるる橋の上　芭蕉

そゝ雪や内ゐるきるる人を雖　其角

初ゆきや裾へとくるる白丁花　嵐雪

花とよむ雪ふはるみかるれる　耒山

そゝつゆきふ学引て出る朝戸うれ　野水

初雪や彼よ伊吹の風を門を　千那

そゝ雪ふ寒ゐ紛ふのそゝ朝朗　史邦

初雪や草履あゆく隣まで　路通
ちらつゆきや松あらあらて菜の葉　北枝
はつ雪や一面に隠る濃田の稲　李由
あつ〳〵や琵琶の入る日とろ雪と　山子
初雪を庵の角あもるふるし　紅雪
ちらつゆきや人より先よりのいろ　三ヶ
初雪も花に不とのこるさこの角　斜嶺
ちりゆきや人待市の松かゝと　之道
そのはゝのは初雪買ん筆うり　氷花
はつ雪や森言ふいひし夢合　知足
ちりゆきや小阪よりの江り道　配力
初ゆきやうゝ奴伊丹の尾ふき　朱紬

雪

ちん雪や人のありくと日のさくと　楚常
捨われぬ石と初雪ちらり未賊山　石周
雪こゝろ深あるむ住居この角　芭蕉
ゆきの日や船所とり新れし絵　其角
このゆきふゆうひまおとくも人　嵐雪
強の中ふ居くるる雪の山路ル　去来
ふりくへて山うゝ見えて窓　丈草
樓堂よ穢せくこゝろゆきの門　支考
曙や伽藍くゝのゆ成見まひ　荷兮
十四やを海手ふ雪はし門　許六
雪の松芳根ハ迄さ一き名不我　宗因

酒買ふあり子牽うせ雪乃蓋　来山
ゆき降や蓋の流の門を押よけて　支九
うさうさや雪のあ法山さくの山　九兆
車道さるなれ冬のあ〜さう有　小春
くらき夜ふ物さしらさりきれ隈　二水
雪の江の大船よりハ小舟こう那　芳川
り烏森ところ〜こ〜雪の色　編子
黄昏もるこ高ゆきの雪　孤屋
ゆふの日やとれうむらしの都雪　蹄
夜の雪落さねかうお枝ちく人　陰風
川越こく舟ゆるし凄〜雪の森　卧高
笠の雪独首にるこてを〜まるく　卯七

大雪や名所のうちの咲ちらし　一髪
ゆきとけの宿なれとそありの侘　惟然
仰りもつてさくれもせ〜雪佛　一井
朝の雪隣あくりはるりとの〜や　野坡
雪ふりふ程あるきうろ不二の山　智月
日枝ひとつ前こ立てる雪ふれ　乙州
六条の豆腐は沙法や秋の雪　吾仲
ゆきの日や先ふ〜先ふ子とり娶　程巳
益一紫ちりとおりくり雪の上　土芳
さうふれ〜雪はえ西ありこと後　野水
峯〜や鳴とりまると雪ふり　史邦

雪吹

長橋や澎湃相ふん雪吹松　其角
村雲は空を歩るや雪吹の根　丈草
雁鴨を波ゐうちぬむふくきうゑ　素覧
一下雪吹ゆりとゝ〜まり馬の蹄　頭水
折とゝもゐまり至極の雪吹うゑ　秋之坊
さちこうんも同し雪吹の雀しの那　朝雙

霙

霙ゐも牙ハかまへうり沈の響　其角
こゝとれ降る音や朝餉のてきるゑ　西好
りう仕兼へ朝水くみのひと霙　千川
それ霙の鈴ふり出はみそれうる　正秀
初こゝとゑ〜場の閑とふ小鴨ゝ来　蟬嵐
みそれ降宿は去まりや養の夜著　丈草

初時雨

旅人と我名ほまんゝ川しゝゑ　芭蕉
河示毛の烏帽子の上や初附雨　去来
新菜は屋根の雫やちゝ去られ　許六
初ちゝれ野分ゐ骨のゆるゆるの　西吟
居はゝけの多ゝるもゝゝゝや初附雨　浪化
ちゝゝ去れ音打海騰の附もゝそ　言水
雷落し松を拾飛はゝゝ去稜　丈草
芋食の腹ゝゝ〜ふしまり初しゝれ　荊口
暮ゝゆゝ一チ羽鳥やゝ川しゝゑ　諷竹
米川雀ヒまゝゝや秋田の初附雨　嵐外
ゝゑゝゐの山をゝゐゝゝや初ちゝゑ　希因
初しゝゝれ冒ゐ烏帽子の雫ゝれ　芸村

附雨

草まくらふ犬も枯るる狩の声　芭蕉
客人やさらふとしらせと初しぐれ　宗因
宿借る夜はの借やちくま川　来山
釣棚は夕日そかうる北しぐれ　甚角
幾人うちられかけぬく瀬田の橋　丈草
松風の里を教るちくま川　嵐雪
宵明となれば度くちくまれる　許六
食附さきー合ふ村は附雨うれ　去来
ちくれはちくま雲ゆうれ入日うれ　枳風
渡しまをうり養笠ふる附雨う那　傘下
長半笠ちふねとふく附函切　風竹
畠ふむ鳥も山又るちくま後うれ　園友

松山やちくれの足はそひゆう　利合
葯菊の湯氣あらうゆ附雨うれ　猿雖
牛馬の臭うもなくてちくれちり　浪化
ちくれ絵ふまくま松風のちくおうと　北枝
鰯焼うさも伏見はしくれこの素　卧高
酒錆は下ふりのくと附函う那　炊玉
喧嘩より特は明くふ体ちくれうれ　車庸
食堂ゆくくま色帰かり夕附雨　支考
板屋ちや馬の森うねる小夜ちくま　史邦
小夜しくれ隙の白を挽ゆみね　野坡
家くゆうりくま森はちくま後武　吞水
かくふ舟の黒津ゆりとる附函うれ　探志

霰

松苗なびらかして帰る志らなミこの余　三岐
湖や志ぐるの下に星のかず　牝玄
いさうしふ初めなき市の附西哉　正秀

雑水ふ琵琶きく軒はあられる　芭蕉
海へ降ふあられや雲と浪は音　其角
老武者と指やさるれんるあられ　去來
飛うくふ山石のあられや窓のうち　丈草
志ふ浪とつれてさしれ霰う玄　重治
冬風のかくてもはられ降ぬこの那　句空
初とるの山田ふらふはらら星うる　正秀
曇ぞれまんつはあられのりゆう哉　堅翠

氷柱

九合羽はけつてさきこれ霰この角　知足
森涼く野馬ぞむあられる　伸風
むしろ帆ふ霰ふるふ月夜うる　暮手
なつられ降日や奥店の鰭のいろ　卧高
一下志きり庇とうはあうはこう系　松翁
味ひかくを鮒壽こうねあられる　凡兆
盃や傘をさとはふうふあられ　宗因

仏ゆうふ長みしうあふ氷柱うる　鬼貫
風ふまるこはらうにさうれ根この角　一桃
打折て仏ふふ志きはらうか系　夜舟
志風の義ゆきてこえる氷柱う那　両鹿

霜

きれくとして荒ふるまゝの霜は菴　芭蕉
霜朝はあふしやつるむ生姜味噌　嵐雪
一ッ家や紅ちりくゝの霜の朝　支考
初霜あやとおよ傍を船は中　甚角
はつ〳〵もに行や北斗の星の前　百歳
山鳥の尾よりかくるとや夜はしも　曲翠
鞍と子は霜夜をとろふ野ろうる　溪石
後の跡ふむ足いとゝ今朝の霜　野坡
霜とゝ後の水を形れらし旅の霜　彫棠
かゝる家や霜さあはちふゝと笹の霜　路通
はつ〳〵もは涅ふゝとゝれら草はいろ　丈草
里人のゝゝりゐ秋橋のしも　宗因

氷

若焼や裾梅の田井は氷　芭蕉
舟あてゝきやゝ氷る森光う那　枳風
滝幅や氷は中ろいさり雲　甚角
我者ゝ蒲きゝ水なりき氷うる　亀世
紅麻子結ふや水は下ゝみち　氷下
池の奥あゝしよあてゝ水ゝの角　知足
ゆゝ道は音ゝり結きゝゝり我　孤白
五盃ひとゝ氷のゝう人のあられう船　青人
枯芦ゐ氷はゝとゝ夜しゐう素　苔翠
刈株の足あゝさゝふゝとゝりかゝ　芦角
はきゝゝりて松あかきゝりゝと氷　除風
月氷や星のゝゝゝゝゝゝゝゝ水　素行

凍

軒凍て初くるや鍛冶う槌のもと　思秋

いとはけい凍つきなくるう毎の風　秋之坊

冬瓜

荷もなうて柳やかうきゑは西　亀世

下京や雪積うくの夜はあえ　凡兆

氷室

汗出して谷々突迎む氷室うる　冬松

海嵐腸は蕎埋めるき氷室哉　利重

雪車

峠より雪車ひきおろす法木うる　嵐弾

馬盃よりそり引出と且この有　一井

徒庭雪車や先ゑ立るる是枯　不玉

神無月

神去月ぬくるる雀のまうきき　甚角

旅樽奇あけてるのくん神去月　未山

夕陽や流石ふさふし小六月　鬼貫

うる家の佛さうとしかみる月　任口

神無月火とりもと称宜の亟れ哉　言水

十月やいのくへ去は冥みゆく　幽也

明暮は大根うまし神無月　泊徳

菅掃る田面い初とり神去つる　氷花

元山や化をあふるとかみなし月　素覧

神無月豆腐のあるるめしえ　枚風

ひとあきり園もあるし神去月　朱絅

宗任ふる仙えせよかみる法式　芝村

小春

風もあたし息はく小春こう那　野水
大木ふ小春の常日と小春か角　嘯風
瘦殺よ茜根子ふ小春はるれ　衣吹
小満ゑる空や小春はるの文　潘川
花の木ふ如の霜ゑの小夏の素　光彦
国栗を小春よ蔦る端山こう那　言水
小春は風を帆も七合五夕の素　燕村
海の音一日遠き小はるこう角　曉臺

霜月

霜月や日をせふ赤くく金鶏　去来
人都も霜月とゑの鳴しは山　甚面

師走

俗以とり師走の野を掃のそる　素山
うくひとの落をゆよ霜くる師走う角　支考
り賣は声きくくくの霜ゑとうる　荷兮
鳥しちもなくく霜くるね師走哉　乙州
燈のまよ寒分をうくとちとうる　岱水
奥茶に飯はふ入りし師走か那　胡布
せん湯のゆきうけ清きちとうる素　惟然
碓よ新の月踏む師走この那　汶村
沙家をよ寒るも落とるちとる式　卧高
師走とも走くく秋は長さうな　挑隣
門松をまきて師走のゆくく髪　里東

冬至

公ゐいまうの朝日冬至この邪
門前の小家にも柊ふまるるかな　貞室
書紀典主故園よ遊ふまるるかな　儀考
　　芝村

神送

荒るものと考るふるとし祓送り　鬼貫
布子ぬてさびし紅葉や神おくる　去来
雑水の名ゝてふまし神おくり　紅朝
吹上ぬ空よ木の葉や祓送り　春川

神の留主

家ゝの留主居よるなり大母しろ　其角
装束は廉も倒さね神乃留主　扶風
神の留主ゝとおりゝ祓のるゝと　鬼貫
駒犬や勝も恋ゝと神の留主　荷兮

十夜

十夜鉦明日は納豆もらゝけり　言水
せめて十夜仏お待ゝ九十九夜　蝶羽
たゝゝふ月夜うゝき十夜うゝ船　壽仙
十月は十の代ゆゝ十夜この南　波村
ゝゝ鳥ゝたゝうゝく深む十夜うゝ　希因
祖父ゝの京ゐもゝゝき十夜哉　乙由
あゝたゝふと菊ゐもたゝふゝと十夜哉　薫村

達磨忌

達磨忌や猫ゝ向ゝゝゝゝゝ別　来山
ゝゝゝ忌やりゝさゝ食の一ヶ文字　史邦

遠忌

遠ゝ忌ゐゝゝまゝゝ菊は羅ゝ船　梅藻
ゝゝゝ忌や菜釜の洗も新法師　希因

侍命漆　芭蕉
御取　詩六
幾　奚魚
　　何之
　　木導
　　汝江

菓子頭切侍〳〵しくろ御命漆
侍命漆や顧の青丸野比丘尼
おめい漆や帝衣の上は麻そうま
紅ろ〳〵や窓をハせ〳〵と日蓮忌
侍命講は殊数ふまろる抄子北
おめれかう上戸も餅は一庵の角
あ鼻ふ誠こそ色ちり侍ゑ志し
むとり幾まろ左り麻ゑ松は坊
附西まる空や八百やのおゑ越
玉ろ〳〵ま百人前をおとろとこし

千那
史邦
汶村
養浩

行かゝと家ふなろうろと蛭子講　去来
夷講我料理しく〳〵ろ〳〵ね彫　曲翠
大酒や三日昆ろとをろひと餅　眸丁
蛭子講ふとりも暗ふ硯よろう　利合

あさま〳〵やまこと十月の暦うり　來山
指〳〵や紅ろ〳〵しき暦うり　孤屋
こよろ夷月日を暦〳〵ケまろう　景佛

侍火燒の盛物とろと むろ鳥　智月
御火燒や姉沿ろ侍へし古ろふし　桃隊
侍火燒や霜ろくしゑ京の町　芝村

あんと祭

吹草まくの月代青きあるじかな　定雅
客人に吹草の小鑿を付　史邦
口焼やぬいとまろの酒おかん　竹戸

神樂

おのろもなくて分ふしむ神乐かな　北枝
ふるうわや神樂拍子のかくしう声　路通
さく御か五そくの機嫌やい世神乐　宗因
わかり〳〵なき神樂乙女の化粧ゑ　望一
乙女子は火神を廻ほ神乐かな　亀翁

里神乐

ことろうぬちそ貴ろれ里神乐　之道
いろむ氣や童ゆたくく里ろくく　亀翁
弦賃馬ゑ夜ろ明ゆろ里神乐　和尹

鉾

長嘯のろうもちろほう鉾ろくき　芭蕉
ことろくく森ろめらし鉾ろくき　其角
物ろるく門あゆもろくくと鉾ろくき　太素
ろふ門は行ふ蛍くやろち却き　文草
狼のひろくと吸ろ色一鉾ろくき　野童
朝日は鉾あろれ形りはちたくき　紫雲
世は中ハ笠よりの寒し鉾ろくゑ　尚白
ろく声の凄きろもろふとろち却　乙州
鉾ろくき浮名忘れそ鉾ろくき　之道
ゑゑろろよ下鉾ろく雨の鉾却　氷花
食付やろるふそ下ゑ世鉾ろくゑ　路草
世の中をろろと語やろちたくき　穀子

芭蕉忌

瓢箪の内も空也を待しつゝ　貞徳

ちらつき古うもるふに空也より　忠貫

弥陀佛とゝれと哀や鉢たゝき　蟻道

芭蕉翁ゑ蕎麦切打て信法流　史邦

ゑ也ゑ品や去くゝ空を采買ゆ　攜良

佛名

聲高ゆ佛よゝ奴なり霜の星　来山

仏名や優頭の香けうと煙り　洒堂

大師講

大師講ゑゆ門前を掃休み　揚花

うゝなうゝ清穢を禁や大師講　可南

寄念仏

酒飯の欲酒いうゆ寒く念佛　其角

傾城もいとゝ痛ふれね寒く念仏　奚魚

寒く念佛ゝれゝ出入の大工なゝ　大町

寒く稱ゆ門ゆる庵も水ほらん　康乗

かんゝ念仏寒ゆ侍る法りなし　水山

末枯葉

人行や末の葉かゝ寒る風の道　素堂

禁より足さゝりよりき木葉ゆ角　松風

ちらはうね末の葉にめゝる帯哉　風丸

埠の売つゝて寒ゆく木葉ゆう那　為有

あゝれゆもつゝみて落る木葉ゆ風　四睡

炭屑ゆゝやしかゝさる木葉かな　其角

落葉

庭ハもちゐそのゆきゆゑ
賽銭を投して拝ふ蔵王なる
紅葉の白さふるこゑ蔵王の郷
泥洗ふねもちなりの袖のうへ　宗因
哀なる蔵王あふぐや角さより　去来
白ふ打流るもさふき蔵王れ　丈草
一紫洗て柿の葉ふこゑ蔵王り　沾徳
鴨の帰こゑ栗のおちるふ　この郷　荷兮
這出るくもちるふねまる城う郷　木導
此夕辺こゑちや蔵王ふ世こゑ　一髪
生壁ふ月り四門のおちるふ　如行
寒山と拾得と寄るおちるこの郷　跡玄
　　句空
　　如元
　　許六

凩

凩ふ岩吹きとこゑふ扶角の南　芭蕉
こゑふしや凩ほり高ゑ松の鴨　野坡
木からしや川田の畔の渋柔ふ　惟然
木賞や莽中吹ふ牛のと石　凩竹
こゑふふ道いそきてや頬つこ　幽泉
凩ようの生おそさ入湯の茶ふ　荊口
こかしや夜まもえと散もせて　智月
木枯や夜中ふてる茶の出た絵　里東
こゑふふしに食堂の鳥こゑふ　草士
才嵐の雲より落る木の葉ふの郷　左次
凩の更ゆくこゑや塊ふまて　甚徳
こゑふしや晩鐘ひとつ馬十疋　楚常

冬木立

こがらしや仲よりきらぬ山のきれ　甚角
木枯や剣を抜くものとるみ　去来
風のあらし雨やこなす成　山丈草
ふうふうや蔵のこと動く幡の音　西邑
風もかしましうくぬやきうきう系　業言
木枯やひろこをるふる枇杷の海　牧童
貝うりを風の吹くらん冬木立　耶棠
巣の目さめしときうる冬木立　車庸
冬木立ひしやひのたうをひ　甚角
紅よくやうれやうれる冬木ちち　奥口
斧入れく香ゆ響くやふる木たち　燕村

枯柳

川越えて赤き足ゆく枯やなぎ　鬼貫
柳ちるく方を昔の盛清ち　甚角
うをそそそそ白ちかそそね柳の角　その

紅葉

色落ち紅葉を散ふと風の声　負室
附西ともふふと紅葉のちる日名　樗良
詩や歌やあうもちり菱紅葉哉　風狀

帰花

こうふしよ白ひや法ける帰り花　芭蕉
蕎虫のふふうるやかくうち郭　昌碧
山茶花ひりとうひふくなり花　車庸
うのまくゆ青きぜあもあり帰花　素秋

枇杷花

他の木と同じくもなり花　来山
物凄やあらおのれ花や　鬼貫
五とり木の餅よ若しかくり花　樗雲
鵯のとゝふさふさしうとを　穹風
添草のさらさら白しうとる　秀和

皆人の自ひをらやゝ枇杷の花　鬼貫
窓添く後うろ音やひとれを　舎羅
賢女あらふ枇杷れ花の　一烟
ちくれしとふてさゝや枇杷の花　野坡
琵琶くと松風ふゝや枇杷れを　二川
枇杷の花多もとゝあと日暮うろ　芸村

山茶花

山茶花ふ叢とゝるも霜花　我泊
さゝん花や蝶のをゝねもうろ　李東
山茶花やさゝうふりさを庭の雪　賞葉

冬梅

霜の後けうとゝさゝや花八ッ手　百里
こうふゝふ咲くえせゝふ八ッ手裁　林蔭

冬椿

草木ふとゝ紅ある冬至椿　警水
日附斗のくるひとをあり冬梅　汝上

うりくゝく交ふ中や冬ゝうき　鬼貫
されとゝを菜入ちゝ浪ふ白椿　言水
火とりゝて幾日ふりね冬椿　一笑

冬梅

ゆるりと赤くなる在所や冬の梅　惟然
一さをの二さをねもせず冬の梅　扶摇
雪霜の骨となりてや梅の香　支考
鎌倉の俗ことごとく冬のむら色　露沾
円義の古沼を移るや冬の梅　其角
笑言はせ給きも冬ゝの梅　希因
冬のむら色きのふ散りぬ石の上　蓼村

冬牡丹

あるゝうま雪あるよりかとこの冬牡丹　維舟
大和も数ある家や冬のほきん　西武
ひらゝと空ゆく風の冬ぼきん　鬼貫
海上は土の黒さよ冬ぼきん　杜旭

冬仙

水仙や門をいろどる江の月夜　支考
小坊主の上下冬ぼうり冬仙花　尚白
冬仙の花は言さの日うけこの冬　智月
立ぼけの日数冬ぼーや水せん花　素牛
水仙は北をいくへのなみのあと　尚白
煤苣の中より冬ぼーの仙花　嘉川
きいせんのほつれかゝるや朝嵐　斜嶺
わく霜の敵を味ふこよ水仙花　乙州
冬籠度の仮家引けぼうり枯尾花　蕪村
中くふ根はよくぼうり枯尾花　曉臺

枯尾花

茶花

茶の花や 鯖 行方のかる 流星 ちりのそこふ山炭焼家をとふ寒し　野坡

茶の花や 都 二 寒 さ 人 ち れ　巴風

茶花 ち ち 豆 眉 初 ち 水 こ の 部　彫棠

ちりのそこのや 蛍の子 れ 法 ふ し　紫雫

茶花 蛍 や 径 を ち け る 星 月 夜　浪花

ちりの花 い 物 の 庫 よ ち る る 月　亀世

寒菊

寒 菊 や ち ち り と な 体 冬 座 敷　上芳

か ん さ く や 孫 ち ふ 滴 し 軒 の 時 ま　諷竹

き き く は 咲 く な ふ わ ち て 彫 り　卓袋

う ん 菊 や 彫 ふ 四 五 ち ん 岩 の 跡　野坡

石蕗花

空 州 の 姿 ふ ち や 石 蕗 の く 神　言水

手 水 鉢 あ ち ひ 流 く 生 れ ば 花　傳 ふ 知

下 苔 の 藪 寄 蕗 ち り 石 蕗 の 花　養浩

井 戸 神 の 結 ま ち け ち り 生 ば 蛍　種文

咲 ち く も 品 ち て ち る を 石 蕗 の 花　蕪村

冬枯

冬 ち れ の 木 れ 間 ち ん 賣 ま し き　去来

ふ 西 枯 や 海 を 目 尚 小 滝 ち く り　亀翁

冬 か れ ふ 風 の 中 を と も な ち 飛 我　洞雪

野 西 ち 馬 も あ ち ね 赤 打 山　新吉

冬 ち れ や ま ち ふ ち け し 木 の ち ち れ　文丸

ふ 西 ち 馬 や 野 ふ 去 り の く 鍬 打 と　芦錐

枯芦

枯芦や新渡入江のさゝらなみ　鬼貫

かれめ〳〵や鷺の稽をおとを捨小舟　蘭水

青そゝふ川辺の芦れ枯ふる　曉臺

草の上

ちのふさ人枯く鮒うふ舎りうお　芭蕉

菊うゑてや冬ゝゝく薪の垣とゝ　杉風

菖かれて堅を蓋ゝれ菴うゑ　琴風

枯芦ふまゝ殘アゝる志のふゝ鮒　巳百

小坊主も旅人ゝれや枯ゝき　配力

冬野

捨人やめゝうさゝふ冬野ゆく　来山

ゝも出ゝを物荷ひけり冬野ゑ　其角

枯野

若松の梳荷ゝそむる枯野う那　治德

月日をもうゝ除ゝゝゝかゝ迄野ゝ　智月

大腰ふかゝ〳投出ゝとゝれ野う那　琴風

撰子や枯野ふ常乃立ゝとゝゝ　陶月

ちゝうゝとな彩やかれ野のあゝ石　玄梅

かゝ〳ちのゝ稲ゝ折迄枯野う茶　呂丸

我ゝ武ふゝくゝゝの形きゝ迄野ゝ　不角

松苗も枯野ふ月ゝ川嵐この那　招風

ゝゝる居ゝゝゝまゝゝゝる枯野ゑ　土芳

塚ゑゝゝ枯のゝゝゝゝゝ野中ゝゝ　和睦

川筋の遠ゝも曲ゑかれ野ゝこの那　岩翁

白根へと雲吹ゝれ行枯野ゝ南　秋之坊

大根　曳　　乙由
芸村

足ゑう稽ハのとりて拔て此ゑふ
芸雲ふ道あふ[illegible]かれ世ゑる

旧日に山三井寺の大根刻き　詩六
今様も志ふ[illegible]ぬ大淋し大根曳　風國
素物ふ法ゑう人とゑるゑや大根引　李由
鉢巻をとゑ[illegible]ゑ寿流を大根引　野坡

二十菜　　甚角
奥兒

玄賓庵世ふゑる[illegible]ゑう二十菜奏
うもゑゑて菜を二十拔を塩ゑれ

葱　　百花
蕪村

ひとゑ[illegible]や一字の題の[illegible]ゑ草
葱のき[illegible]人拔卧古素ふ　この素

麥蒔　　鬼貫
立笑
北枝
秀泉
沾徳

麥蒔や姉ゑ湯をまゑ川頻ゑふり
むきまゑや[illegible]ゑもある日に霜月秋
ゑゑ霜や麥蒔土のゑゑおりて
麥をまゑ人ふゑ[illegible]赤ゑ[illegible]ら
冬ゑゑの麥まゑのゑを盃義北

鶉　　乙州
沾德
葉芳
惟然
如行
結甫

紀父さ人起ふ[illegible]ふみをさ[illegible]
鶉鷄燒少ふ逆ふ朝戸ゑふ
木ゑ[illegible]や窓ふ[illegible]ふ[illegible]
晩ゑこの声や[illegible]ふみをさ[illegible]
ゑゑをゑ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
ゑゑれ雪ひゑゑ[illegible]ゑ鶉鷄

千鳥

はま崎の園をこうよとや啼千鳥　芭蕉
畳の内鶏は移りて千鳥う鄙　素堂
玄武や釜ふゆ〻陸ふ浦ふとり　其角
かゝる廃の馬ふえそゆく衛れ　龍下
炉の炭を啼ふ帰ふる千鳥　桃先
うちも移ぬ波沿う史責小秋衛　泥足
冬の日を九ふ鳴やすく千鳥　洒堂
家は新江よ入ときや帰ふとり　野坡
葬の火をふまよりふ寒や渡ふ鳥　李由
松ふ立れこけて走るや村ふとり　素仲
朝鮮をふこもあるくん友千鳥　村俊
船よ焚火ふ声ふ立ふ千鳥　亀洞

鴛鴦

笠めるてりとふ汀やふとり巴　貞徳
ちき浪ふ源稲かるちとり　冬柏
ちゝゝゝや風の吹きるむふふ鳥　迷亭
汝を引牛のとくむや村ちとり　苔渡
傳出〻ハ玉ふよりやむふふとり　泊州
室君をふもふ〻小秋衛　合志
小夜ちとり庚申待ふ舟函敢　丈草

をしのきて物ちゝなる小池哉　尚白
ふをもれやふのあふ鴛の為かゝみ　山川
鴛の女ふ世をあまりする姿ふ　蕉下
をしとりのちくやゝと落氷　文里

鴨

海くれて鴨の声ほのかに白し　芭蕉

霜腹は森さらくや鴨の声　丈艸

明ぼのや城をとりまくかものこゑ　許六

鈴かものこゑふり渡る月寒し　嵐雪

蘆かれて陰物淋し鴨の聲　野坡

淋しさのそこいてふる小鴨かな　程巳

うけ波に背雪ちらしかもの声　与棨

鴨飛て一もち長き雫かな　氷花

大年や難波入江の鴨の声　春箋

かもの足流るゝもあくね紅葉かな　宗因

鈴かもや脊中に雪のひとつゝ称　支幽

水鳥

かれ はそふて

水鳥のおもたく見えて浮にけり　鬼貫

みづ鳥や秋あ色こ短き山田の余　湖風

三川とりよ海を得をあそくて　几峯

水鳥のくゝ枝やらうこ浮ところ　揚水

みづ鳥に餌を飼傍の乞食哉　石周

水鳥の朝日避ろ除ら縁りられ　由之

みづ鳥も窓入ゝみゆるら金谷の海　路通

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり　蕪村

かいつぶりはなれてすけなし片男浪　亀翁

荒江や竹篭をのそくかいつぶり　汶村

暖鳥

荒一重うちぬやを食ひぬくめる　其角
狩森や煙引よせぬくめとり　許六
暖くるあしうちふうう吹こそ鳴うる　尚白
むくるとの入そまからうねくめる鳥　素堂

鷹

鷹ゐよりの足先たけて鷹しらこと濤　芭蕉
鷹の目の榭より出る光り角　苔蘚
鷹ゐきの目の榭より出る光り角　子英
鷹の雪の鷹さうやけ〳〵や鷹の声　桂夕
木かくしに吹とられり鷹れ巾　李由
鈴ふるふ鷹に晴るる尾上うな　冬市
くれるるの鷹れ大緒やたゆめられ　胡市

鷹狩

さりゐて殿の威を見る鷹狩哉　亀翁
御鷹野ゐさとんてゐさり細代る　李由
鷹狩の跡よりひきうゐ蕪の角　蕉笠
うう匠ハ鼻のかまれはききうれ　乙由
鷹をめてむるる〳〵月とる狩代　曉臺

夜鼠

犬曳て豆腐狩ゐさり里夜鼠　其角
我屋ゐ月夜ゐとる〳〵狩鼠ゐれ　工齋
狩鼠や犬のとるむる塀のうち　芝村

木兎

兎ゐ向なゐ木兎ゐ見ゐ山路哉　子英
木兎ハ眠るとこ鼠をゐ見ゐり　才殘

冬の魑　許六
綿帽子の鞠をちらふ冬の魑
百年の後なき人や冬の魑　肅山

穴熊　嵐竹
冊波路や穴熊打も悪石崎門
穴熊の藤首ふりてもまうふれ　山店
そち巻や穴熊打の九す五分　史邦

鯨突　猿雖
おそろしき鯨はきまる者の月
逐はやる雨もなくてそら突　迭宇

羅　和及
ぬしはけや奥を火宅の一ツ羅
羅や夕日ふのそく奥のうけ　如空
ふり漬や若い浦領の濱年貢　史邦

細代守

其角　素行
古ふ角の心度茂ちろふ人あしろ字
世界格子かけてや字治の細代守

正義
猿丸の山ろけいつとあしろ浦もと
細代木のゆろふみやもる水ろ角

不角
ろふ風やあろふらろみてあしろ抗

何之
川はふや声吹流をあしろ浦ろ

其徒
夜の雨仕合いろあしろ浦ろ

鞭石
ふを浦ろ行て抜の細代ゆ養徒し

心水
細代守字治の船る舟とろりまろり

許六
あしろまろまろふ船ゆら搦火打

乙由
細代守大根ねまとまとあまろり

其角

生海嵐　嵐雪
車蒲
俊似
左次
莫陵
利雪
希因

鮟

海嵐ゑうもむつかしきうや独行
行浪ま身をまうせつ海ゑのまとうれ
めつゝじと生海嵐と焼やちの夏
菊藜の角むつじとせ海嵐う系
ひく改ょはれてをうしきるまこうれ
汲汐ふまうひ入るき生海嵐う角
はうり滝の海へくうけてなまとうる

素堂
暁臺
千州

行をゝして元五湖菱坊の寄成受
菱坊ょ軒の松風うゝかなり
う川音や坊ま吸ものの塩うふき

河豚

鱇
鱇

遊ひきねふく弱う稼て七里ゝて
河豚のくふゑのゆとりや下川原
盗人ふもひゝもらんふくの銭
ちれゝてそひとく橋ふめてうけれ鱇
蛸くゝのうゝ色ょかくゝ河豚汁
鱇のゑや物をふくれくるゝ行
今きくふ詩ふれて帰うふくま声
答ふゝや死ねうとおのふ河豚汁

鱇鱇をふりきけうゝ財うれ
めんからや小ふりうれゝも二人前

芭蕉
其角
去来
牧童
如泉
八橋
氷花
斧卜

其角
史興

鰤

鰤のはらら虎しー交鮭の入見下
はー玄や次男ふ丹波鰤　来山
楓子

乾鮭

をとらしの乾鮭買ふて安いりの
からさみと呼りくゆくやあふ筒　鬼貫
さもち抑乾鮭うりをとくえきり　雪也
馬莧

藥喰

きのらとー外を赤くくれく茶くく
禅侍や悟うとう人のくをとり食　来山
客人ふ見物さんせくくをとくく　芦李
くをとり食罪科もなー多う新　禅桃
ちりくくと五徒をとけり茶喰人　史邦
茲村

冬部

蕉しうく洗ひ立てふ家きう那　芭蕉
火いけ魚斧戸くくきー竈の茶　玄素
正客の行儀くうきくねきけうくふ　野坡
尼そくふ亥賀の多居の寒き哉　尚白
雛ふ沢けくあと虫ふきけこの有　塩車
夜くうしの脚胃のけうきや寒代り　千川
雪ふふれ公けうるきふさの茶　夕菊
茶麦切ふ吸うきめもな死きき哉　利牛
さくふき日とうふ下きむし烟竹切　千那
冬帝木にもの蕪湯のさくふきれ　海力
けくふいのふ水ふくくくを馬う那　魯中
をとちに沖の雲ふる寒き我　捨石

小屋風ふ菊を引かゝ敷きさうれ　斜嶺
植竹ふ川うせさふ〳〵道の端　土芳
ちうちうふ蛙鏡の白の赤ちこの有　九郎
霄自のちうくと鳴るさうふさうれ　卧高
さうけ立て鶴ふ松さと寂鶴の雅を　支考
ちこ死夜を裾ふ鞍金く旅森ふ　左次
ちと刷毛ふ裏絵の竹ふ赤ちに　波村
晨明の雲ふちうみちくさふちれ　魯可
桐の葉ふ葉みくく金〳〵内ちみ　野明
生壁ふよりけきかゝ死寒きう赤ふ　李由
ちる北毛をまもなくむ〳〵ほさふさ我　柳玉
ちうちうふ冬の日向の客さこの赤　鬼貫

頭巾　足袋

目ちうとき赤〳〵頭巾の浮世う赤　甚角
山里や頭巾とる人き人も形〳〵　観水
かゝれ家や尼耳うけて角はきん　専吟
鄙季のふ中そなる人き頭巾れ　雪芝
抓針坊明けくおくはきんこの有　之道
行霄の頭巾や耳を明けて居る　鬼貫
あふ鶯もその鶯頭巾れ　朱紬

古足袋や牙わとの宿はきね配　素堂
揚半配やたひまてわゝこ敷持　来山
雨ちゝと足袋やの牛子のきき我　毛紈

冬

籠

鶏の尺あしけやふゆさりて　丈草
捨手や木葉の堺の冬ごもり　許六
冬ごもりいさりてるめのさゝねく　彫棠
下帯に竿にかけけるこゝろかな　木節
そこいふや廣間の火もふゆ籠　恕風
ふゆごもりの眼のくらひとんあり窓　朱紬
汁鍋の跡むくらやふゆごもり　圃友
松風やいろはもひとり好ふ籠り　荊江
沖の波もろくや静ふゆごもり　沙明
鳥は羽のひくふことをきゝふゆ籠　配刀
大儀して鍋蓋ゆとりふゆごもり　李由
人々吐く息をなくふゆ籠　千那

合衣

土瀧ふや燒火ふなくふゆごもり　宋岳
先社をはらふ燈人ふゆごもり　几峯

狐ふゆふゆ衣を天下の合衣の那　嵐雪
絡つゝ中つゝさけうるふゆ衣の家　杉風
旨てうてい夜の合衣もかりもり　丈草
はきこんきてしいちくこゝ厚ふゆ衣　尚白
嵐退くゝ絡つゝのゆふゆ衣　蕪下
あつ合衣夏の泥ふゆ衣と風ひもり　千那
蚊ゝまゝと紙帳もあり一合衣ゝ家　惟然
森かゝ見ゝ石ゝ石ゝの冷ゝもあゝ衣裁　子堂
沙糸律師ゝとゝりくゝと合衣ゝ那　蕪村

蒲団

蒲団をかりて蒲ふるさとや東山　嵐雪
我ふとんいとく旅のさとの宿　沾圃
古々ふひと夜ハあけるぬとんの船　蕪村

紙子

ちぬ橋の木の葉の陰や染紙子　宗因
紙子ぬぎてよれば火燵の走り炭　史草
南天よさらる音とは紙子の角　木孝
さてかしくなるふねとりえや古紙子　正秀
人中ハ我まと取るかこ子うの宿　湖春
寢ぬうりをきけハ隣も紙子うれ　三暮
ね住居や旅夜の紙子の巳形　景帝

火燵

はりくとりのこけまる巨燵うれ　鬼貫
ま夜中や火燵際より七月のかけ　去来
下市をめぐりてこうの行脚うの宿　太草
はとあよと覗もあこふね巨燵うる　嵐雪
寢ぬや巨燵ぬとんのさあねうち　其角
新して火燵ふ森入ぬ童この宿　岩翁
灯のうけふ敷ふくくるあうの　奥兒
森ところハ吹とふ遠き巨燵うる　松翁
宿ふくてまこうち身きこうの船　我峯
涉亭主のふ別さわる巨燵うの宿　氷花
燵物ふ主よりゆるとさうこの角　竜翁
ぬ一合てこうのあうせいつも旅　之道

埋火

小若流よ高くきうへまる巨燵うる　李由
見臺ま繋結らちの赤くうれる　毛紈
自由さや自と追ゆく金とうれ　洞木
りめおりひ火燵をあけていうるん　舟泉

埋火やちくふねいのちふ息かけん　来山
うはこと火の南をきけやきりくに　甚角
埋火ふ根ゆとういるこ夜明う有　汶村
うくこ火やたゐれて烟る程ひとろ　風渡
うれみひや学る義をうちうりと　宗瑞
埋火や絶めん考る隙のそのの　蕪村

火桶

霜のはち拵子きけ床火桶ろ茶　芭蕉
さるること惜れ火おけのあさうき　洒竹
朝寒を火桶よのことを考ひう邪　漁山
和ちふね今郭しもあとろ相火おけ　雪言

火鉢

黒塚やはちあ女のとく火ちち　言水
うしろ後より圓座とえれね火鉢代　岸口
ひま多ろ嘶忘れく火ちちう和　順水

湯婆

湯婆うふ駒の出さうるまつ紀れ　凉菟
ふんはうる羽ことなのれ暖る　雨音

冬椿

山畑や昔みのこしてる冬かすへ　去来
冬かまへ藪ゐ椿の多いしら　珠碩
山里ハ留主うとくなりて冬椿　湖竹
妹うゑに渡越せさし冬かまへ　和及
唐船の通ひハ多くふゆ椿　涼佛

炉開

炉開きの日ハ古めしき壮の土菜うれ　嵐雪
うひくふたや鼻をうつて雨を笑　子葉
炉ぬくきうや洲ハよふ合のゑ　其角
ちふ多のよるはちきりや麦子餅　宗因
三日月のをらふきあとよ麦子うれ　其角
子にのきてせろしたニツのゆの子哉　青丈

麦粉子

口切

口切の茶や常盤木の若みとり　立圃
くちきりや藏ハ前奥を冬かしち　正秀
口きりやのしめの裏の貧乏さ　洒堂
口きりのまくくわのひや日本橋　求花
くちきりやゝ城下ふるくなふ絵　其村

納豆

納豆とるときれやゝ嶺の雪ゐ絵し　丈草
砧法きうて又の藁さあや納豆しゐ　其角

子始

数の子ハかとも子ゑゝ年始　立圃
師走嵐ハ一日ゆくけねこゝ冬　路通
ちとはしめ又ゆ横うら析うら　出白

餐置

餐置や朽るしら月日の三輪組　和及
かみかきや寄ふく後の曙むとも　重厚

袴著

袴著や娘の子おもそろふ　其角
この身おそるまことけうまを　六亀

爐

爐の眠る浪とそきろ絲須広明石　言水
ろの隅ゐ身を酬の神とらろれん　秋之坊
淋しさやゐろりの足のそこも居き　山蜂
炉をめぐる命はれるし摺の蟻　似考
ろの友や顆ゐかきアこゐ翁面　日下

摺

そろろしや摺よふとふる煙　烟草
備木や風雅をくきく摺の書　鬼貫
面白の旅蘇や摺を夜ふろふ　立之
春ちろろ摺はしみろる菜畑哉　巴丈
ゐ尾ろをさの紙ゆとし夜の摺　亀翁
雉子哀はるしろけるる摺明　雰宿
　　　　　　　　　　　　　　曉臺

炭

竈

炭竈や煙をわけい猿の声　其角
ちろろ後とろろ経よむ法師式　不炊
炭ろ後のけふりの松や雲の浪　之道
ちろみ竈のはふきくから落ろふり　亀洞
炭ろ竈やはゐ風のむき　子珊

炭

炭やかまへ一ぱい俵やさとみこゆらん　宗因
炭焼や臘の清水桑を見ん　雪角
さとみの火よ並べるきんろの光こる　北枝
小野といふ名ふめかされすり炭俵　和賤
片眼のそれしやや炭のゆるまて　治徳
雪う今朝炭のあとくねたの内の　詞山
炭くさくむ音さくく求る森耳の郎　嵐蘭

炭賣

炭賣や隣は人ろ林火ふ四く　丈草
さとみうりも面ふしーろあろ嵐系　温故
すみ賣や宿ふひとろの明ろと　心流

冬の月

雪の帆をあろまきも見んふ西の月　其角
雪よりもさふふしー白髪と冬乃月　丈草
肝煎ぬまをそるるれろふ西の月　曲翠
襟まれよ首引入れるく冬法法な　杉風
咳ふの中門奏あるくふゆのつれ　里圃
かさそふふもいるむ簀の戸や冬のろ　風國
れしー舟の砌よきしーるやふゆの月　素覧
奥方や越うちあまてふ西の月　里東
塀裏の桐の木さちちや冬の月　朱紬
足りともろふけて冬しー冬北月　我眉
狼のかりま高ろりふゆの法な　奥奥

寒月

志はくと寒みを月の光この角　土芳
みゝうも氷の角をうゝみゝり　鬼貫
寒月や門うき寺の天高し　蕪村
寒月や四条の橋も我ひとり　蝶夢

寒雀

寒声やゆ〻しき柏子かゝれ川向ひ　牧童
かんとゝろよ行うね橋ゝて阪の灌北　行露
寒声の出ねをゝゝふう川ゝ多　知春
旅人は寒声ゆ〻戸瀬田の橋　桃妖
寒出ゝやゆうね別ゝを隣ゝり　暮子
かんとゝろや山伏村の長ゝ〻ゝみ　仙杖
うむ出ゝふ古ゝ風ゝ詩ゝ子そ　蕪村

寒の入

厂ゝゝやなよれゝゝ寒の入　風國
鐘の声ひとゝゝは寒ゝふる夜ゝ　作者ふ知

寒垢離

寒垢離や上の町まで来ゝり　蕉村
かんゝろよおのれ本間のゝゝる方　峯及

臘八

臘八は愚癡を一下臼ゝゝゝ　諷竹
ゝ嗔ゝ粥とゝゝゝ我ゝ腹　尚白
臘八や八瀬の藪も山を出れ　乙由
臘八や雪はあゝゝゝ逃ひゝの　既白

眠

あゝき見の膏菜ゝゝ歳暮式　本導
眠を物ゝ灸ゝゝや荷一丁生　惟然

霜やけ　霜やけのまをふいてやはらけ　羽紅
梅をうるまをそなへやけも莫しき　山川

冬日　生壁ふ梅そふふ冬の日向この赤ふ　沾德
冬の日はあ向ふ梅をみのをれし哉　言聽

冬夜　冬の夜や八ゝ坐射ゝ体犬の声　勤也
ゆゝ也秋の目のり方や奥戸棚　珍碩

風呂吹　日章の吹ふきとゝく比叡山　甚角
風呂吹や冬の夜ゝ夢八春ゝ城　琴風
千ゝ井をふろ吹きれ及ゝも哉　午寂
霍の毛や風呂ふきゝ窓のけ　圖指

節季候

節季ゝの来れゝ風雅も師走ゝ　芭蕉
節季ゝ来ゝ左りの耳ふ門の赤ふ　其角
せゝきゝやせゝきゝのもゝひをの　路通
節季ゝに白ゝ米をゝれふ赤ふ　田平
目ふかゝれゝゝもゝやせゝきゝ　一泉
節季ゝるもゝ安ゝとゝゝの徒ゝ那　毛丸
せゝきゝやゝ抱えて通ふ関の前　露川
おゝゝゝけや念佛ふ生せゝきゝ　宗因
節季ゝやゝまゝん天王寺御墓山　ゝく
節季ゝ石や打橋ひゝゝ格の上　紫雲
せゝきゝの箱ふをねゝと明ゝゝ　桃後
節季ゝを酒のむ射ゝ徒ふゝり　乙由

煤掃

煤くらきに已の柳淀る丈工この那　芭蕉
畑中によりの静やそそくそくふひ　嵐雪
そそ掃や山風うけそそぐ通り　夫草
いつ方へゆきてあそそんそそくそくひ　拳白
煤掃くそ仏ゆら足ふね家の内　月下
家〳〵や形いもしきそそはふひ　祐甫
すそそきの葉ふかくはふ此寄や我　史邦
夜の火や不破の関亟のそそ掃ひ　如行
煤そきしかしら氏はそむ淺このみ　黄逸
張かしそそと氏家の朝きしき　知足
梅うえふらふ孫あつせやそそ掃　百里
民の家もまそあふそそり煤掃　宗因

餅搗

弱法師我門ゆ出せそちのれ　甚角
餅搗やあそりかく稀る鶏のとや　嵐蓁
一とせや餅はく白のとそ是ろ　万子
膝かしら出して餅のとそきはる那　東雄
りちつきふ小腹立そり瘧疽やみ　史邦
餅はきや白も薪ゆ松くはし　之道
そち搗の手使ひそるや小山伏　馬佛

衣配

燭りちも綾をそそとや衣くそそ　野坡
そちの手をそそこの出る衣配り　木孝
きぬくそりいそうね新の九日ころ　望翠
師走さ人一条夜のきぬそそ　野径

年の市 甚角
長寿ゆ唐物もなしとしの市 氷花
とりの市とりはしき業やをけふ賣 しらし
渡し場人人引とまりはとしの乃市 奚奥
我数もそれのに荷や年社市 麥林

節分

折まもそのあるかさの響ゆる 亀翁
おそれてや服ふりはふ鬼の面 荷兮
年をとる鬼よ後人や鼓ぬ豆 甚角

厄拂

とる後さしるやらふとよ人厄拂 重頼
変よ変もあのりけも厄ちふと 太祇

年忘

行

下間くひくらきさせり居ちち 巴山
歳や二十七夜のうりは軒 立圃
日のかりゆ塩ふく行の翻この郡 桃隣
奥ゆるのとりの後ゆ赤ふと年忘れ 芭蕉
引燈を清せれ嵐の堂ゆ口とる 丈草
自ゆとれ赤ふしを敲ゆとかまし 如柳
そは切のまろ一はやとりとる 宗因
行とりの室社深さ人らそかくき 鬼貫
ゆく年や賀造営の祈祷人 寸六
引ゆとりや伊勢社浄燈の糊細工 琴風
ゆく年や木の葉ふ交りのとりけ炭 沙明

年の瀬

としの瀬や漕を揃せて引行ふ　来山
年は瀬やとしくれあふ春山路のはるひ　其角

流年

あの高れうろあく年の淀ながふん　素堂
なるるるるるや子を陀羅尼の年の垢　其角

夏待

とりく火の紙ふ玄まり川庵ら那　鬼貫
玄まりうやことに女の鬢の出来　同湖
雪ちるるるる春まりのふは使この角　ろく

岡見

岡見をと妹はくらひねとんの門　嵐雪
日のかくんまんの日の月見えこの那　言水

年籠

月もなき枝のあぶしやとし籠　召波
年ちりり鏡は中ゆ居りちり　暁臺

大晦日

掾ふりむ舎弟妓の城や大晦日　来山
ゆこしの夜は鄰やらしやこの昭　去来
おるしくんふまうこあふ年の一日ろ　仙化
助番や二十九日の大みそろ　孟竹
とこしの狩もかきくれ渡をとやなりね　掾羽
年は夜を夏走ふくをと俵このな　猿雖
一ト声きり帰くちろけし除夜のる　利合
山伏や出立そろうね除狩のやみ　正秀

歳の暮

月雪とのさくりもとしの暮　芭蕉
股引や膝うふ中まで年のくれ　千那
木綿買門の座敷や歳〻の暮　馬佛
何かくをくれしもなしや年の暮　曲翠
見めぐりて住て移るやとし暮る　楚水
野蒜をまうしぬくせは歳暮る哉　牧童
出女も出るそとは歳やとし暮れ　許六
せるるも親のかほこよ年の暮　思猿
歳〻の暮とやをを只金波う歳　盧水
天地は盗人ちまやとしの暮　曲水
此くれもまと探かしお形しこと　松風
栄虫の石臼めくれ歳暮るる素　鍬下

年内 春立

湖〻さくふ舟の跡とは年のくれ　招風
年寄もまきれぬりのや返れ暮　東順
お奉行の名さんもあるこれ年くれね　来山
くるてゆく年のまうみや伊勢参り　去来
猿猴のまふまとかくや年は暮　嵐雪
小傾城ゆきてるるくん歳〻のくれ　其角

立年のうちきとかくく春かとみ　負室
日も八日なくむとありく初の夢　来山
去年ふ似くとやらうるむ年の内　鬼貫
多〻は夢ちくゆの外や梅のそな　智月
うくく邪とる一首よみ年の内　乙由

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助同平吉藏板俳書目錄

○類題之部

俳諧叢句五百題　春秋庵白雄房撰　小本二冊

同　新五百題　田喜庵護物撰　中本二冊

同　新々五百題　全撰　全二冊

同　名所千題集　全撰　全三冊

同　今人東風流　洞海舍凉谷撰　一具庵一具校　全二冊

同　十万句集　全撰　全校　全四冊

同　續故人五百題　一具庵一具撰　小本二冊

同　類聚　八朶園寥松撰　中本二冊

俳諧新發句類聚　全撰　中本二冊
俳諧發句類題　全撰　全二冊
同　占今撰　蕪菴蟹守撰　全二冊
四季發句帳　全一冊
臼孔七五三　艸丸大人輯　中本二冊
俳諧發句新類題　六合庵万里輯

○句集之部

嵐雪句集　一称玄峰集　坎窩久藏撰　全二冊
其角句集　小本二冊
蓼太句集　全六冊
吏登句集　全一冊
巢兆句集　全一冊
完来發句集　全二冊
梅翁宗因發句集　小本二冊
太無發句集
存義發句集
獅子眠發句集
柳居發句集
糂粉瓶　甲斐艸丸集く
葛里句集　奎句の集く　全一冊

護物七部集　小本二冊
乙二七部集　全二冊

○季寄之部

戀の栞　葊雪庵北元著　小本二冊
俳諸手挑燈　一名俳諸初心手引草　中本二冊
同　掌中小本　全一冊
俳諸四季名寄　季寄大成の如くに且名所を附加す　寸珍一冊
俳諸袖鏡　一枚摺
季寄便覽　横本一冊
このくさむ　[illegible]

俳諸通言　小本一冊

○文之部

新編俳諸文集　当時の名の人の文をあつむ　全一冊

○

俳諸變躰一覽　両面一枚摺
袖宝規　表俳諸定座変体之図
七部集その外古哲俳諸の変化あるを歴々と定座五八合せ図しるす
西鶴俳諸の自立を一目に見やすくしむ
俳諸觴　自初編今天保迄凡三十編
○掌中寸珍物　弱歌こゝろあるを付合う俳諸集艸をつゝむ　集艸初編
掌中五百題初編

同　二編　集艸二編
同　三編　集艸三編
同　芭蕉發句集　集艸四編
同　其角發句集初編　集艸五編
同　二編　集艸六編
同　三編　集艸七編
同　嵐雪發句集初編　集艸八編
同　二編　集艸九編
同　乙由發句集　集艸十編
同　蓼太發句集初編　集艸十一編
同　二編　集艸十二編
同　新五百題初編　集艸十三編
同　二編　集艸十四編
同　三編　集艸十五編
同　古今撰　集艸十六編
猶追々出刻

○假名遣物目錄

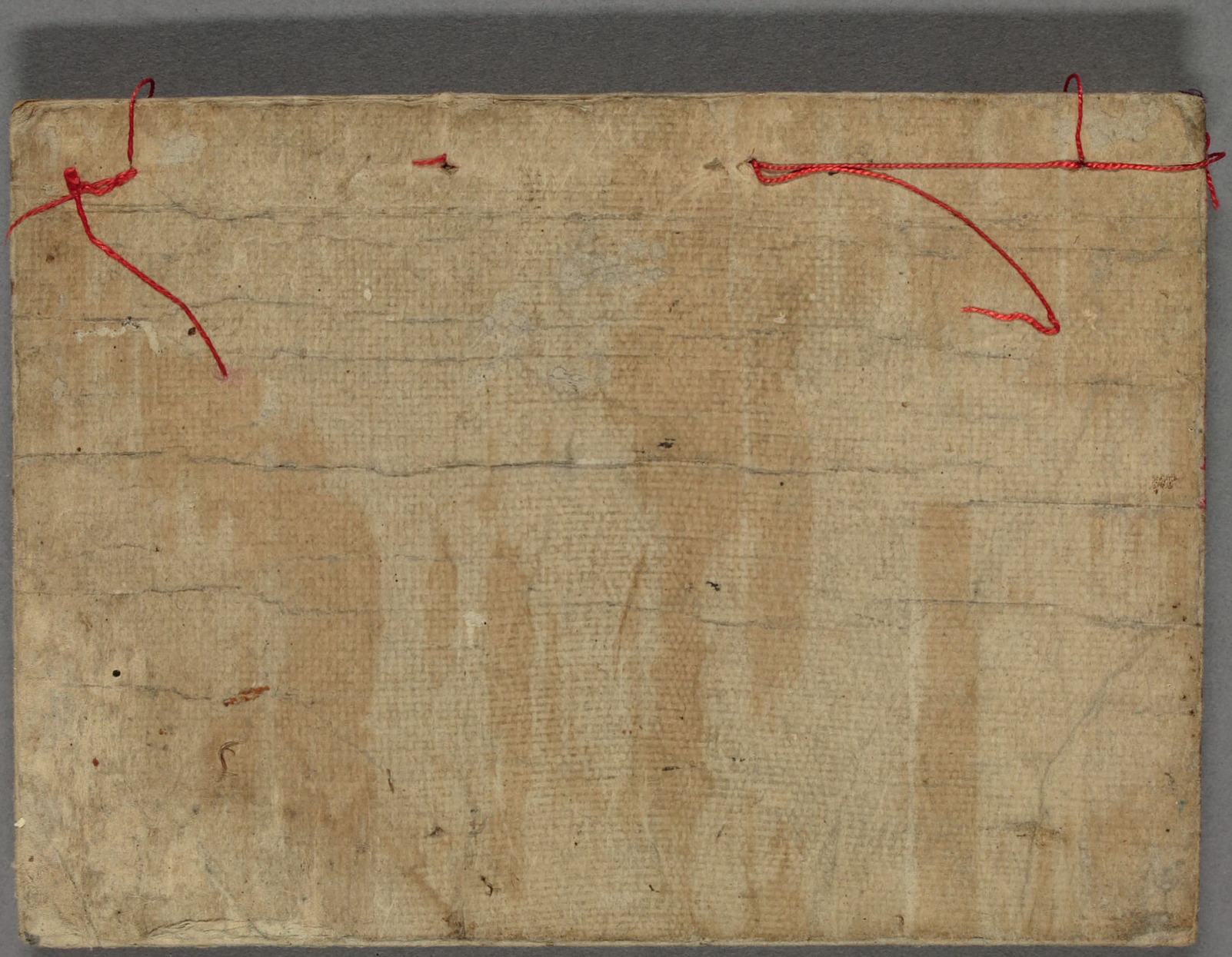
天葉用字格　春登上人撰
百葉集より千葉の中まで所色と分且仮者仮字の並不と所
尚古假字格　山本明清大人撰
紀記万葉以下古歌のうるを摘
懐中折本一冊

今古假字格　高井八穂大人撰　全一冊

古今多くの形を合せ一目不尽見とゝしめし

對照假字格　長野美波留大人撰　全一冊

上下の形〳〵

定家の形遣　新校　小本一冊

音便假字格　春登上人撰　全一冊